

街路樹維持管理計画書

令和3年12月

東京都建設局公園緑地部

街路樹維持管理計画書

目次

はじめに

第1章 剪定の基本事項

- 1. 街路樹剪定の基本事項 1
- 2. 街路樹剪定時の留意点 4

第2章 樹種別剪定標準計画

- 1. 管理目標樹形の設定 7
 - (1) 枝張り 7
 - (2) 樹高 11
- 2. 剪定手法の分類（タイプ分け） 12
 - (1) 剪定手法の分類方法 12
 - (2) タイプ別剪定の基本的な考え方 12
- 3. 樹種別剪定標準計画 13
 - (1) 常緑樹 14
 - クスノキ、シラカシ、タブノキ
 - (2) 落葉樹 23
 - アオギリ、イチヨウ、エンジュ、ケヤキ、サトザクラ、スズカケノキ、ソメイヨシノ、台湾ンフウ、トウカエデ、ユリノキ

はじめに

建設局では、東京 2020 大会に向けて、マラソンコースや主要競技会場までのアクセスルートとして想定される大会関連路線において、歩行者や観覧者の安全性や快適性の向上を図ることを目的に、街路樹の樹冠拡大による緑陰の確保を進めるため、平成 29 年度に「維持管理計画書」を作成の上、本計画に基づき計画的な剪定を行ってきました。

この取組を通して、街路樹の剪定に当たっては、剪定委託の受託者と都監督員が目標樹形や剪定手法について協議の上、相互の共通認識のもと計画的に剪定を実施していくことの必要性や有効性を再認識しました。

そこで、樹冠拡大を目指す路線に限らず、全ての路線の街路樹について目標樹形や剪定手法を定めて計画的な剪定を実施していくための参考資料として「街路樹維持管理計画書」を作成しました。本計画書では、街路樹の樹種毎の特性に応じた適切な剪定を行っていくため、イチヨウ、サクラ、トウカエデなど主要な 13 樹種の剪定手法について「樹種別剪定標準計画」としてまとめました。本計画では、対象樹木が目標樹形より①小さい場合、②大きい場合、③ほぼ目標樹形の場合、④崩れた樹形を再生する場合など、4 タイプに剪定手法を分類してまとめました。

今後の剪定に当たっては、本計画書に基づいた剪定手法を維持管理計画として施行計画書に記載の上、剪定を実施されるようお願いいたします。なお、主要な 13 樹種以外の剪定においても、類似の街路樹の剪定手法を準用するなど参考にしてください。

建設局 公園緑地部 計画課長
(街路樹担当課長兼務)

坂 下 智 宏

第1章 剪定の基本事項

1. 街路樹剪定の基本事項

(1) 剪定の時期・種類

① 基本剪定（冬期剪定）

●目的

・主に落葉樹を対象として、樹木全体の骨格をつくることを目的として行う。街路樹剪定の基本となる剪定であり、基本剪定、もしくは剪定時期から冬期剪定という。

●時期

- ・剪定のダメージを最小限にとどめるために樹木の休眠期（晩秋～早春）に行う。
- ・クスノキ、タブノキなど暖地性の常緑樹は寒さに弱く、切り口が寒さにさらされるとそこから枯れる場合があるので、厳冬期の剪定は避ける。
- ・2月頃から水を上げ始めるカエデ類などは年内に剪定を行い、生理障害を回避する。
- ・花を觀賞する花木類の剪定は花芽形成の時期に注意して行う必要がある。サクラ類、ハナミズキ、コブシなどは、夏頃に形成された花芽が越冬して翌年開花するため、冬期剪定は軽微な枝抜き程度にとどめ、花芽を残すようにする。サルスベリはその年に伸びる新梢に花をつけるため、冬期剪定を行ってよい。

② 軽剪定（夏期剪定）

●目的

・萌芽した枝の密度調整、乱れた樹冠の整正、台風などの強風による倒木防止、病虫害の発生防止を目的として行う。

●時期

- ・梅雨前後から秋前を基本とするが、酷暑期は極力避ける。
- ・樹木が葉を茂らせ光合成により養分を蓄える時期であるので強剪定は行わない。
- ・落葉樹の夏期剪定は樹木の健康と生理を損ねる上、街路樹に期待される緑陰形成、CO₂削減、ヒートアイランド現象の緩和等の機能の発揮とも相反するため、必要最低限の剪定にとどめる。
- ・暖地性の常緑樹の枝抜きはこの時期が適切であるが、着葉しているため、枝葉の切除量は全体の1/3以下とし、できるだけ樹木の負担を軽減する。

③ 支障枝剪定

以下に示す枝（支障枝）は適宜、適切に除去する。

- ・からみ枝や徒長枝、逆枝など、樹形を乱し、樹木の健全育成を阻害する枝
- ・通行の支障や事故を誘発する恐れのある建築限界内の枝や視距を妨げる枝
- ・枯枝 等

(2) 剪定の手法

以下に主な剪定の手法を整理する。

剪定の種類と位置、各剪定のイメージについては図-1～4 を参照のこと。

① 切返し剪定 (図-2)

- ・ 樹冠を一回り小さくする目的で行う剪定。
- ・ 目標とする樹冠線よりも長い枝を分枝部から切除する。

② 切詰め剪定 (図-3)

- ・ 樹冠を整えることを目的に、新しい枝の途中で切除して短く切詰める剪定。
- ・ 定芽がある場合はその直上で切除し、切断箇所から萌芽する新たな枝によって樹形を再構成する。

③ 枝抜き剪定 (図-4)

- ・ 樹形を乱す不要枝や込み合っている枝を取り除き、枝葉のバランスや密度を整える剪定。
- ・ 主枝、副主枝、側枝から構成された樹形を保ったまま剪定を行う。

④ 枝おろし剪定 (参考)

密度の高い混み枝や建築限界にかかる中枝や下枝などを鋸などで幹の付根部分から切り落とす剪定。枝抜き剪定の一つ。

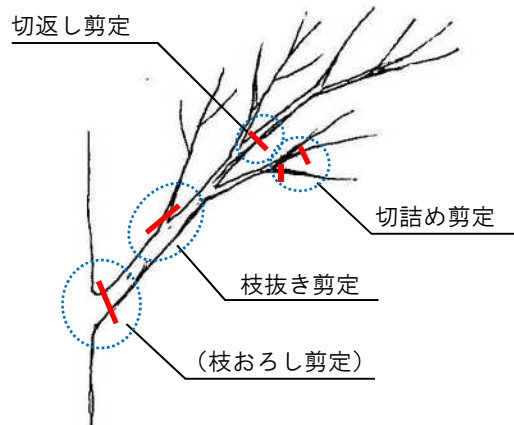


図-1 剪定の種類と位置

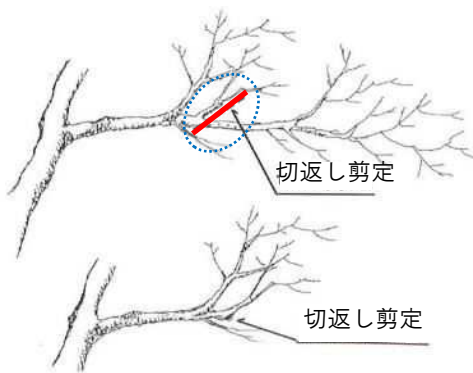


図-2 切返し剪定

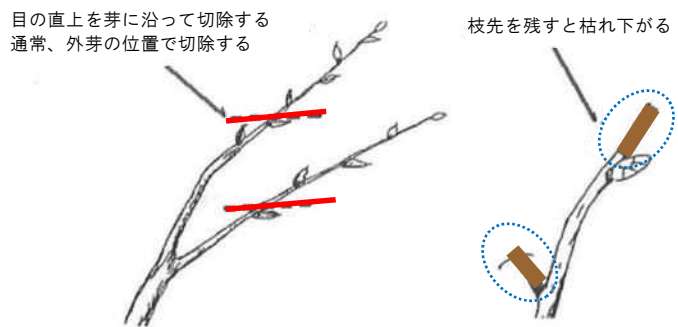
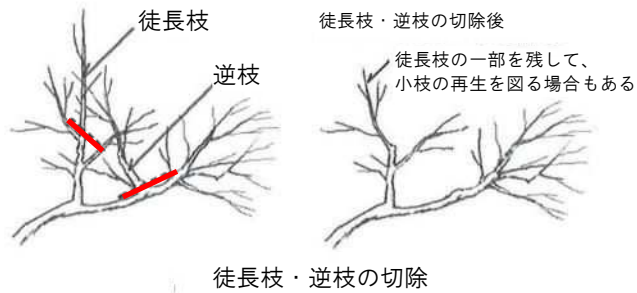
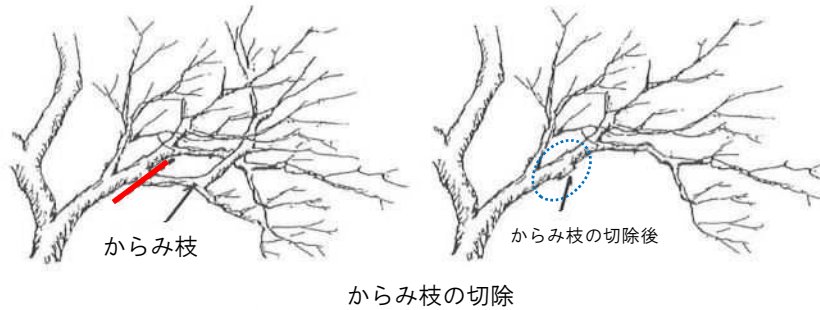


図-3 切詰め剪定



徒長枝・逆枝の切除



からみ枝の切除

図-4 枝抜き剪定

2. 街路樹剪定時の留意点

(1) 正しい位置での剪定（ブランチカラーの保全）

剪定に当たっては、枝の付根の下部にある膨らみ「ブランチカラー」を残してその直前で切り落とす。

これは、ブランチカラーに腐朽をくい止める働きをする防御帯が形成されるためである。ブランチカラーを切り落とすと防御帯の形成が阻害され、腐朽が生じる場合がある。

また、ブランチカラーの先に枝を残したり、付け根の上部にあるバークリッジを傷つけたりしないようにする。

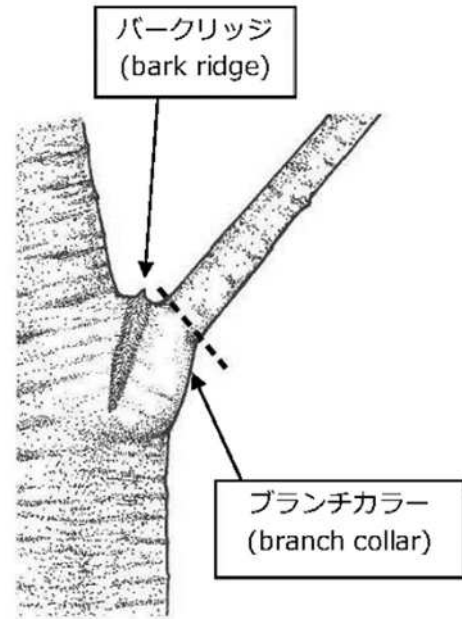


図-5 正しい剪定位置

(2) 切り残しの切除（スタブカットの防止）

切り残し（スタブカット）があると、樹皮の巻き込みができない上、やがてこの切り残しに生じる腐朽が、幹にまで達して大きな腐朽になる場合があるため、切り残しを作らないように剪定する。

切り残し部を見つけた場合には、幹本体を傷つけないように極力健全部に近い箇所で切り取り、切り口が直径 3cm 以上の場合は、防菌及び癒合促進処理を施す。

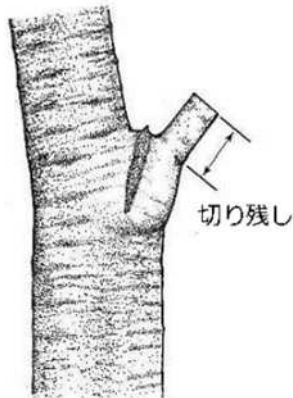


図-6 スタブカット



写真-1 スタブカット

(3) 枝おろし剪定（主枝の切除）

主枝は可能な限り剪定しないことが望ましいが、建築限界を越境、もしくは将来的に越境する恐れのある主枝は適切な時期に正しい位置で切除する必要がある。

主枝は一回で切ろうとすると、枝の重さで幹の付け根の下方部の樹皮が裂けてしまう。そのため、枝の切除位置の上部でいったん短く切詰めて枝を軽くし、その後に適切な切除位置で切り戻す。

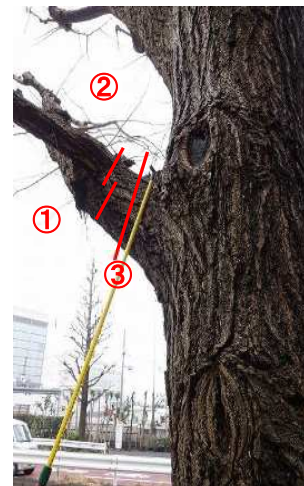
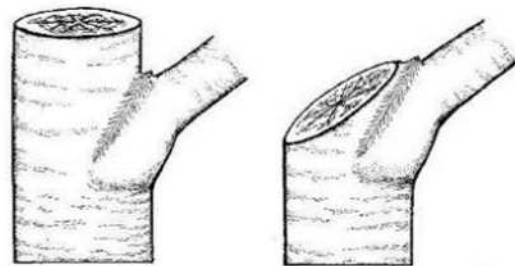


写真-2 枝を切除する順番

(4) 太い枝の剪定、幹の切除

剪定に当たっては、太枝や幹を途中で切り落としてはならない。やむを得ず切り落とす場合は、枝や幹の分岐部で切除し、剪定後の切り口に防菌及び癒合促進処理を施す。



不適切な切除

適切な切除

図-7 太い枝の剪定位置

(5) 風圧軽減剪定

根の張り具合に対して樹冠が大きい場合や、樹冠先端部の枝が混み合っただライオンテイル[※]を形成している場合は、強風などにより倒木や枝折れがおこる危険性が高まる。そこで、倒木の危険性を回避するために、切返し剪定による樹冠の縮小または枝抜き剪定により混み合った枝の間引きを行う。

樹冠を縮小するに当たっては、強剪定で樹冠を詰めるのではなく、目標樹形を定め、数年かけて計画的に樹高や枝張りを縮小していくことが求められる。

※ ライオンテイル (Lion tail)

先端部分に枝葉が偏ってついている枝のこと。形状がライオンのしっぽに似ていることからライオンテイルと呼ぶ。枝は自重で少しずつ垂れ下がるようになる。枝が長く荷重が先端部分にかかるため、強風などによる倒木や枝折れの危険性が高くなる。

なお、 $L/D \geq 40$ (L: 枝長 D: 分枝部の枝径) の場合、折損する危険性が高くなる。



写真-3 軽減剪定前のケヤキ (樹高 25m)
(新宿副都心)



写真-4 軽減剪定後のケヤキ (樹高は 18mとし、
大枝を抜き、樹形全体を縮小した)

第2章 樹種別剪定標準計画

1. 管理目標樹形の設定

街路樹の持つ緑陰確保や大気汚染物質浄化などの多様な機能を最大限発揮するため、歩道幅員や樹種本来の樹形等を踏まえた上で、管理目標樹形を定め、これに近づくよう管理（剪定）する必要がある。そこで、管理目標樹形を設定するための目安を以下に整理する。

なお、管理目標樹形は目安として算定された値を基に、以下の留意事項を参考に、監督員が剪定委託の受託者と協議の上、決定するものとする。

●作業条件の考慮

剪定に使用する高所作業車（アウトリガー）が街路樹側の車線（進行方向一番左側の車線）に収まるよう、当該車道で使用可能な高所作業車の規格を踏まえた樹高、枝張りとする。

●現況との整合

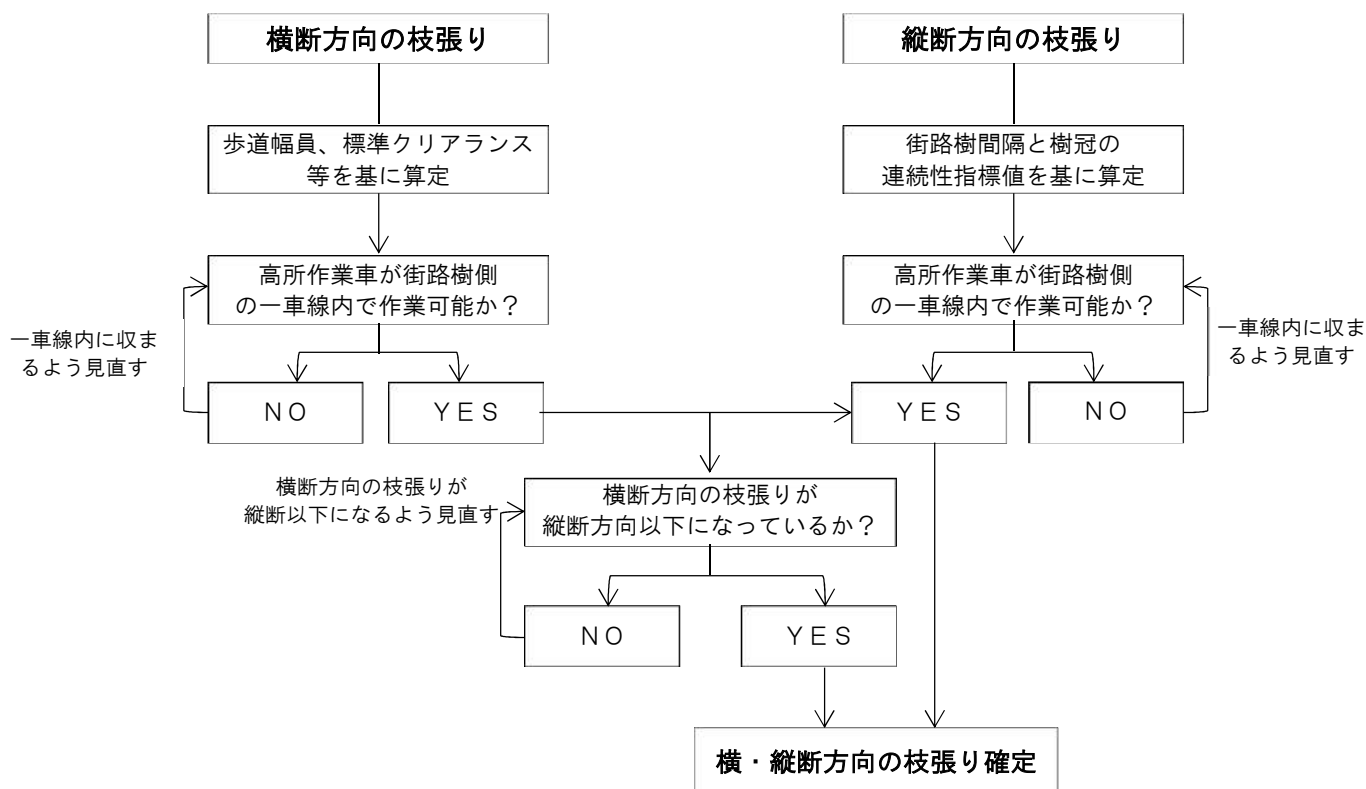
目安として算定された値を基に、これまでの管理や生育状況、周辺状況などを踏まえ、管理(拡大)可能な樹高、枝張りとする。

●道路交通の安全性確保

管理目標樹形は基本的に路線内で統一するが、信号機や標識付近に位置する街路樹は、別途、視距を確保するための管理目標樹形を設定する。

(1) 枝張り

以下のフローにより、横断、縦断方向それぞれの枝張りを設定、検証する。



① 横断方向の枝張り

歩道幅員、標準クリアランス、幹と歩車道境界の間隔をもとに歩道側の枝張りの目安を算定する。

●算定式 $W = (b - dx - C) \times 2$

W (Width) : 伸長可能な枝張り

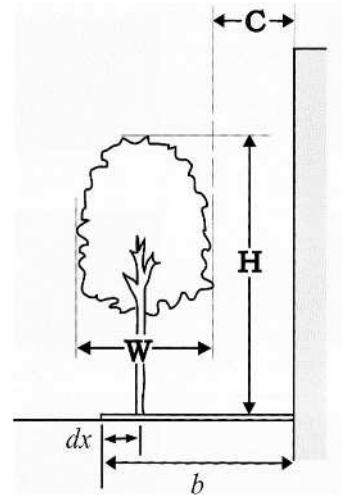
b (breadth) : 歩道幅員

dx (distance) : 幹と歩車道境界の間隔

C (Clearance) : 樹冠と建築物の間に必要な距離 (標準クリアランス)

※沿道土地利用により標準クリアランスは異なるため、以下の表を参照。

沿道土地利用	標準クリアランス
オープンスペース 公共施設	0m
ビル街	0.5m
商店街	1.5m
住宅街	0.5m
その他 (工場等)	0m



■算定式を基に算出した横断方向の枝張り一覧 (歩道側の標準枝張り)

b 歩道幅員 (m)	dx 歩道境界からの 幹の距離 (m)	C (横断方向クリアランス:m)		
		オープンスペース 公共施設 工場等	ビル街 住宅街	商店街
		0	0.5	1.5
4.0	0.40	7.2	6.2	4.2
	0.45	7.1	6.1	4.1
	0.50	7.0	6.0	4.0
	0.55	6.9	5.9	3.9
	0.60	6.8	5.8	3.8
4.5	0.40	8.2	7.2	5.2
	0.45	8.1	7.1	5.1
	0.50	8.0	7.0	5.0
	0.55	7.9	6.9	4.9
	0.60	7.8	6.8	4.8
5.0	0.40	9.2	8.2	6.2
	0.45	9.1	8.1	6.1
	0.50	9.0	8.0	6.0
	0.55	8.9	7.9	5.9
	0.60	8.8	7.8	5.8

b 歩道幅員 (m)	dx 歩道境界からの 幹の距離 (m)	C (横断方向クリアランス:m)		
		オープンスペース 公共施設 工場等	ビル街 住宅街	商店街
		0	0.5	1.5
5.5	0.40	10.2	9.2	7.2
	0.45	10.1	9.1	7.1
	0.50	10.0	9.0	7.0
	0.55	9.9	8.9	6.9
	0.60	9.8	8.8	6.8
6.0	0.40	11.2	10.2	8.2
	0.45	11.1	10.1	8.1
	0.50	11.0	10.0	8.0
	0.55	10.9	9.9	7.9
	0.60	10.8	9.8	7.8
7.0	0.40	13.2	12.2	10.2
	0.45	13.1	12.1	10.1
	0.50	13.0	12.0	10.0
	0.55	12.9	11.9	9.9
	0.60	12.8	11.8	9.8

車道側の幅は、歩道側の枝張りと同じ幅にすることで左右対称の美しい樹形を作ることができるが、特にケヤキやイチョウのように十分な空間が必要な樹種は、車道側まで切詰めてしまうと本来の樹形が崩れてしまう。

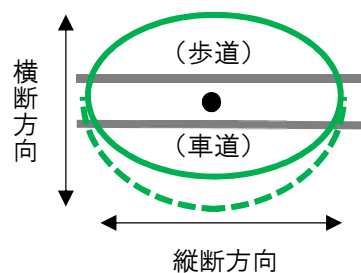
そのため算定式から出した枝張りは一律に車道側にも適用するのではなく、後の維持管理作業に影響が無いよう留意したうえで、枝の広がりを意識して車道側の枝張りを確保すると良い。



写真-5 ケヤキ（中杉通り）

歩道側はクリアランスを確保するため切詰めているが、
車道側は可能な限り枝を伸ばしている。

■目標樹形のイメージ（破線は車道側に枝張りを確保した場合）



② 縦断方向の枝張り

対象街路の標準的な街路樹間隔と樹冠の連続性指標値を基に、縦断方向の枝張りを設定する。(樹冠の連続性指標値＝枝張り／植栽間隔)

この数値はあくまで目安であり、現場の状況を鑑み、隣の樹木等と接触しない範囲内で縦断方向の枝張りを伸ばした楕円形の樹冠に設定することができる。

■樹冠の連続性指標値のイメージ(図の場合、連続性指標値＝0.5)



■街路樹間隔と樹冠の連続性指標値の比較による縦断方向の枝張り一覧

車線数 (両側)	樹冠の 連続性指標値*	街路樹 間隔(m)	枝張り (m)
2車線	0.5	6.0	3.0
		7.0	3.5
		8.0	4.0
		9.0	4.5
		10.0	5.0
		11.0	5.5
		12.0	6.0
		13.0	6.5
		14.0	7.0
		15.0	7.5
4車線 以上	0.7	6.0	4.2
		7.0	4.9
		8.0	5.6
		9.0	6.3
		10.0	7.0
		11.0	7.7
		12.0	8.4
		13.0	9.1
		14.0	9.8
15.0	10.5		

*中央分離帯がある場合は0.1を差し引く。

(2) 樹高

樹形タイプと枝張り/樹高比、枝張りを基に以下の算定式により樹高を設定する。

●算定式

$$H = W \div f$$

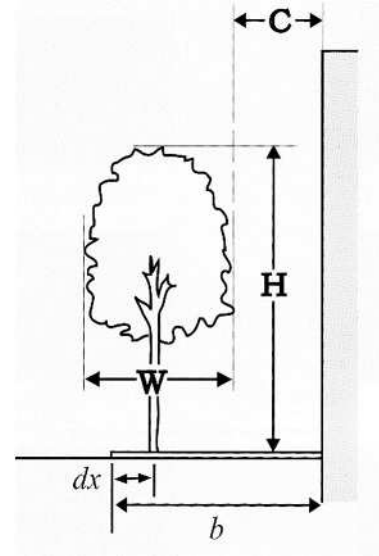
H (Height) : 伸長可能な枝張り W と樹高に対する枝張りの指標値 f から求められる樹高

W (Width) : 伸長可能な枝張り

f (fraction) : 樹高に対する枝張りの指標値 (枝張り/樹高)

・ 樹高は上記の式を基に算定した値を目安とし、
街路樹の生育状況や沿道土地利用、高所作業車の
作業可能な高さを踏まえ設定する。

・ 標準的な車道幅員 (3m) の場合、17m級の
高所作業車まで使用可能であるが、通行量や
当該路線の状況を踏まえて使用車両を決定する。



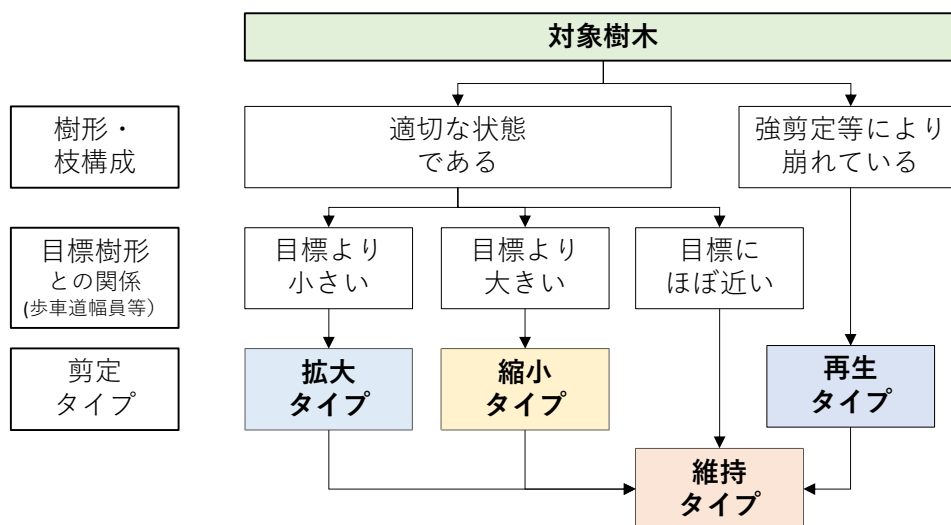
■樹形タイプと樹高に対する枝張りの指標値 f を基に算定した樹高一覧 (W÷f)

樹形タイプ	樹種例	f 枝張り/ 樹高比	W 枝張り(m)								
			4.0	4.5	5.0	5.5	6.0	6.5	7.0	7.5	8.0
円錐形	イチヨウ	0.4	10.0	11.3	12.5	13.8	15.0	16.3	17.5	18.8	20.0
卵円形	スズカケノキ タイワンフウ アオギリ トウカエデ	0.5	8.0	9.0	10.0	11.0	12.0	13.0	14.0	15.0	16.0
	シラカン タブノキ ユリノキ	0.6	6.7	7.5	8.3	9.2	10.0	10.8	11.7	12.5	13.3
球形	エンジュ	0.5	8.0	9.0	10.0	11.0	12.0	13.0	14.0	15.0	16.0
	クスノキ マテバシイ	0.6	6.7	7.5	8.3	9.2	10.0	10.8	11.7	12.5	13.3
盃形	ケヤキ サクラ	0.7	5.7	6.4	7.1	7.9	8.6	9.3	10.0	10.7	11.4
	ソメイヨシノ	1.0	4.0	4.5	5.0	5.5	6.0	6.5	7.0	7.5	8.0

■ H=12~17m(H17mクラスの高所作業車が必要)、 ■ H=17m以上(高所作業車での対応困難)

2. 剪定手法の分類(タイプ分け)

(1) 剪定手法の分類方法



(2) タイプ別剪定の基本的な考え方

①維持タイプ

- ・対象樹木が管理目標樹形に近く樹形を維持する場合、当該路線の平均樹高に合わせて側枝と一部の副主枝の切返し剪定によって樹形を維持する。
- ・切返し剪定を継続し、それに適した枝がない場合は、部分的に副主枝の切詰め剪定によって側枝を再生させる。

②縮小タイプ

- ・既存の並木が管理目標樹形より大きい場合、その全体や一部が突出して大きいものは当該路線の平均樹高に合わせてやや強度の剪定によって樹形を縮小する。
- ・副主枝の切詰め剪定によって縮小した後に萌芽してくる枝を数年かけてコンパクトに整え直す。

③拡大タイプ

- ・若木を用いた新規の並木や欠損を補うために植栽された樹木の樹高が当該路線の平均高に及ばない場合、立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめ、樹形全体を大きく育成する。
- ・将来の骨格枝を定め、枝のバランス等を考慮し、枝抜き剪定を基本とし、切詰め剪定は最小限にとどめる。

④再生タイプ (参考)

- ・不適切な剪定などによって樹形や枝のバランスが崩れ、微小な剪定で対応できない樹形の悪い街路樹を主枝や幹の梢部を含めて切詰め剪定によって骨格をつくり直す。
- ・枝先のコブを除去し、通常の枝配りに再生する。

3. 樹種別剪定標準計画

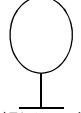
以下の樹種を対象として、これまで樹形拡大のために作成した維持管理計画書を基に、都道全体で使用するための樹種別剪定標準計画を作成した。

対象とする樹種は以下の主要な 13 樹種とし、各々について維持タイプ・縮小タイプ・育成拡大タイプ・樹形再生タイプ(参考)の計画書を作成した。なお、主要な 13 種以外の剪定においても、類似の街路樹の剪定手法を準用するなど参考にする。

(1) 常緑樹：クスノキ、シラカシ、タブノキ

(2) 落葉樹：アオギリ、イチョウ、エンジュ、ケヤキ、サトザクラ、スズカケノキ、ソメイヨシノ、台湾ワフウ、トウカエデ、ユリノキ

■樹種別剪定標準計画

樹種	クスノキ		
管理方向性	<ul style="list-style-type: none"> ・樹幹に強い直射日光が当たることを嫌うので、強剪定を避け、剪定は枝透かし程度にとどめる。 ・緑陰形成と樹冠線を整えることを目的とし、空が少し透けて見える程度に込み入った枝を除去する。 		
剪定期期	夏期:6月～9月頃 酷暑期、強乾燥期は避ける	目標樹形：球形 枝張り/樹高比：0.6～	 樹形イメージ
目標樹形の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・目標樹形は「第2章 1. 管理目標樹形の設定」(P.7～)を参考に設定する。 ・剪定樹形は樹木の伸長量をもとに決定する。 		

* 青色の枝: 不要・剪定対象枝を示す

上方枝

外芽を残して定芽の真上で切詰める。
形成する樹形の樹冠線を想像して切り過ぎない。

側枝

副主枝から発生した側枝は切詰めて樹冠線を整える。

樹冠幅

樹木の間接枝を基本とする。

ふところ枝

副主枝として伸ばし、枝が必要な場所に育成する。
立枝は切除する。

車道側建築限界
(4.5m)



コブや胴ぶきから出た枝

不定芽の発生防止。
樹木の健全育成を図るため、カサの形成を促す適切な位置で切除する。

コブの切断面は平滑に仕上げ、
防菌及び癒合促進処理を施す。

頂部

将来、芯となる主枝を伸ばすため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。

全体

主枝—副主枝—側枝のバランスのとれた構成とするため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。
→残した副主枝から発生した側枝を切詰めて樹冠線を整える。

下方枝

少なくなりがちであるため意識的に残すようにする。

不要枝の整理

定芽の上で切除

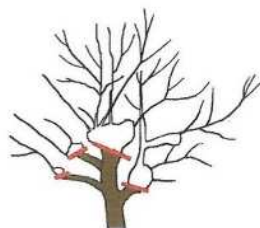
歩道側建築限界
(2.5m)

外芽は残す
外芽を残し、定芽の真上で切詰める。

側枝の切除位置

安全の確保・樹木の健全育成のため、枯枝、からみ枝、逆枝、建築限界を越境している枝などの支障枝は適切に切除する。

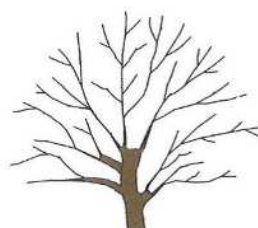
* 頂部の仕立て方



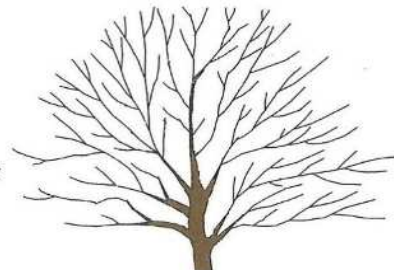
剪定前
(初年度剪定位置)



初年度剪定




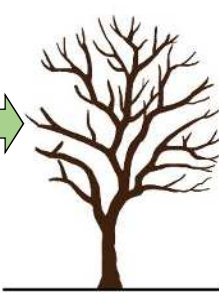
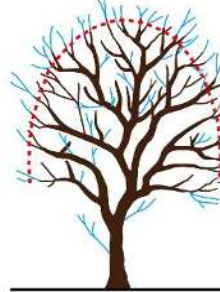

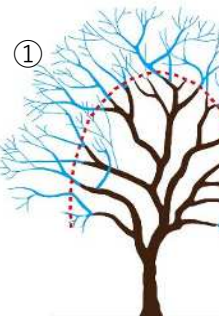
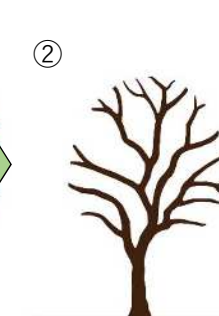
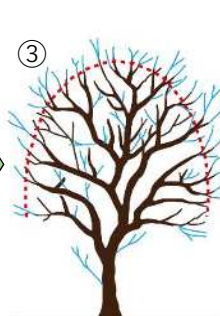
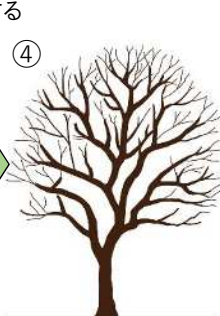
2年目剪定後



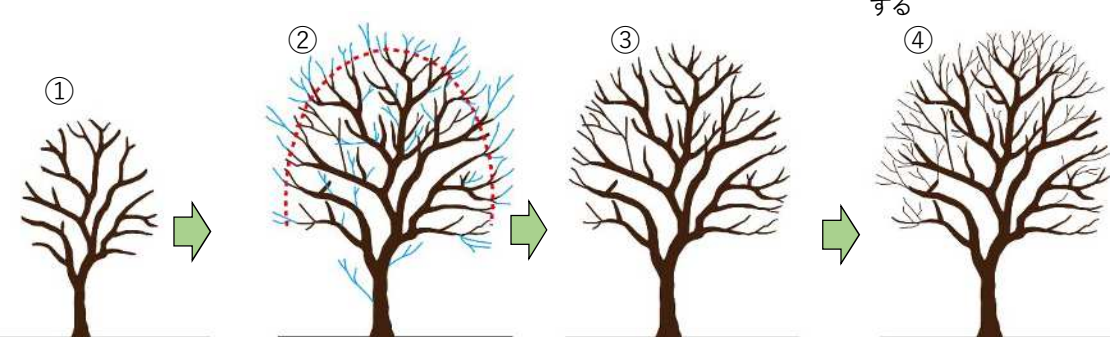
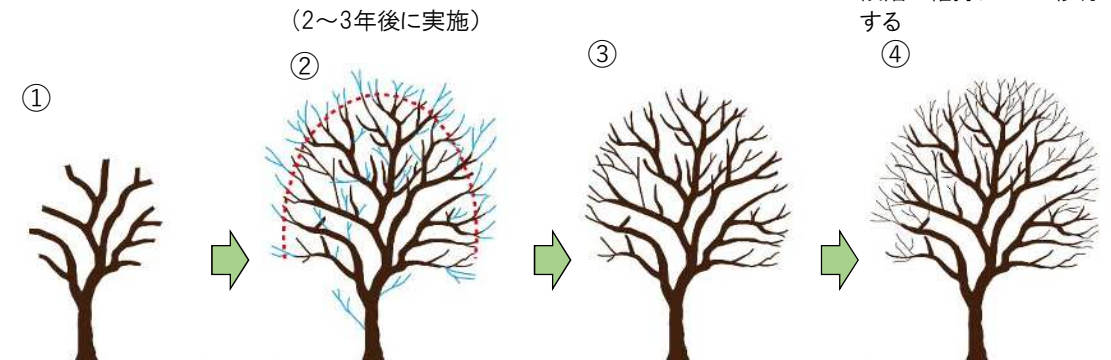
樹冠の仕上がリイメージ

切詰め剪定を繰り返し行った結果、頂部が「こぶ状」になっている場合、「こぶ」を切除して、頂部をおわんを伏せたような形に柔らかく作り直す。

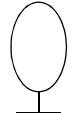
■樹種別剪定標準計画

樹種	クスノキ
維持タイプ	<p>・樹幹に強い直射日光が当たることを嫌うので、強剪定を避け、剪定は枝透かし程度に留める。</p> <p>・平均高に合わせ、側枝と一部の副主枝の切戻し剪定によって樹形を維持する。</p> <p>・切戻し剪定を継続し、それに適した枝がない場合は、部分的に副主枝切詰め剪定することで側枝を再生させる。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>①</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>②</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>③</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>④</p>  </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 20px;"> <div style="width: 45%;"> <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切戻し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな球形樹形を作る。 ・頂部優勢を意識して、上方の枝の密度を薄くする。 ・下方枝の切り過ぎに注意して剪定する。 ・枝の伸びしろを考慮して、現状より樹高と枝張をそれぞれ目標樹形よりも小さくなるように剪定する。 </div> <div style="width: 45%;"> <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・樹形が整えば剪定は2年置き程度でよいが、狭い空間でコンパクトに維持するには隔年に行う。 ・頂部優勢のコントロールと不要枝を除去する剪定を繰り返す。 ・切戻し剪定を主体とすれば大きな切り口ができないため、翌年以降も新生枝が著しく発生することは少ない。 </div> </div>
縮小タイプ	<p>・対象樹木が目標樹形よりも大きい場合、副主枝の切詰め剪定によって樹形を縮小し、後に萌芽してくる枝を数年かけてコンパクトに整え直していく。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>①</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>②</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>③</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>④</p>  </div> </div> <p style="text-align: right; margin-right: 20px;">概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 20px;"> <div style="width: 45%;"> <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頂部優勢のコントロールを意識し、下方枝の切り過ぎに注意、下方ほど多く枝を残す様に剪定する。 ・残した枝が樹冠線より突出している場合は、側枝を外芽の直上で斜め切りする。 ・やや強い剪定をする場合は、副主枝を切詰め剪定し球形に調整する。 ・定芽のない枝はブツ切りにせず切断面を斜め切り、ふところ枝がある場合は、ふところ枝の直上で斜め切りする。 </div> <div style="width: 45%;"> <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・副主枝を切詰め剪定した枝に複数の新生枝が出ているので、2～3本残して剪定して側枝を育てる。 ・ふところ枝を残して剪定した枝は、新生枝を3～5本残し側枝を育てる。 </div> </div>

■樹種別剪定標準計画

樹種	クスノキ
<p>育成拡大タイプ</p>	<p>・樹形全体を大きくすることを目指し、将来の骨格を定め、枝のバランス等を考慮しながら育成する。 ・建築限界内の支障枝や込み入った枝等の除去は枝抜き剪定を基本とし、切詰め剪定は最小限にとどめる。 ・立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめる。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・育成を目的として基本的に枝の縮小は行わず、枝抜きによって不要枝を除去し、枝の密度を調整する（切返し剪定、枝おろし剪定）。 ・自然樹形に相似した樹形（球形）に整える。</p> <p>②～③ ・頂部優勢を意識しながら切返し剪定により枝の密度をコントロールする。 ・不要枝を除去する軽微な剪定を基本とし、切り過ぎに注意する。 ・目標樹形に達するまでは、この剪定を繰り返す行う。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら維持タイプに移行し、切返し剪定を主体に側枝を整理して柔らかな球形樹形をつくる。</p>
<p>【参考】樹形再生タイプ</p>	<p>・萌芽力が強く、数年かければ美しい樹形に蘇らせることができる。 ・早く樹形を回復させるには、ベースとなる骨格を残して剪定をする。4年から5年の期間が目安。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・大枝の剪定は、剪定箇所が裂けないよう二段切りとする。 ・大枝の切り口は斜め切りにして腐朽菌が入らないよう防菌及び癒合促進処理を施す。 ・主枝を切詰め剪定し、骨格となる枝の長さを調整する。 ・球形となるように、また、下方ほど枝数を多く残すことに留意する。</p> <p>(2～3年後に実施) ②～③ ・常緑樹は落葉樹に比べて枝数も少なくほとんど伸びないので、外側に向かって素直に伸びた枝を数本残して、不要枝といわれる立枝やからみ枝などを切除する。 ・切り口から萌芽していない場合は、萌芽している部位まで切戻す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら維持タイプに移行し、不要枝の枝抜きと切返し剪定によって樹形を維持する。</p>

■ 樹種別剪定標準計画

樹種	シラカン		
管理方向性	<ul style="list-style-type: none"> 概ね卵円形の樹形となるよう、枝抜きと切返し剪定により、主枝、副枝、側枝から成るバランスの取れた枝構成を目指す。 夏期剪定は緑陰形成と樹冠線を整えることを目的とし、空が少し透けて見える程度に込み入った枝を透かす。 		
剪定時期	2月～3月頃 厳冬期は避け新芽が萌芽する前	目標樹形：卵円形 枝張り/樹高比：0.6～	 樹形イメージ
目標樹形の設定	<ul style="list-style-type: none"> 目標樹形は「第2章 1. 管理目標樹形の設定」(P.7～)を参考に設定する。 剪定樹形は樹木の伸長量をもとに決定する。 		

* 青色の枝：不要・剪定対象枝を示す

上方枝

外芽を残して定芽の真上で切詰める。
形成する樹形の樹冠線を想像して切り過ぎない。

側枝

副主枝から発生した側枝は切り詰めて樹冠線を整える。

樹冠幅

樹木の間中枝を基本とする。

下方枝

少なくなりがちであるため意識的に残すようにする。

車道側建築限界
(4.5m)

こぶや胴ぶきから出た枝

不定芽の発生防止。
樹木の健全育成を図るため、カルの形成を促す適切な位置で切除する。



コブの切断面は平滑に仕上げ、防菌及び癒合促進処理を施す。

頂部

将来、芯となる主枝を伸ばすため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。

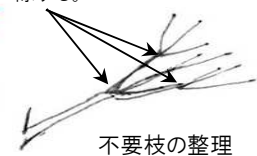
全体

主枝一副主枝一側枝のバランスのとれた構成とするため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。
→残した副主枝から発生した側枝を切詰めて樹冠線を整える。

ふところ枝

副主枝として伸ばし、枝が必要な場所に育成する。
立枝や枯枝などの支障となる枝は切除する。

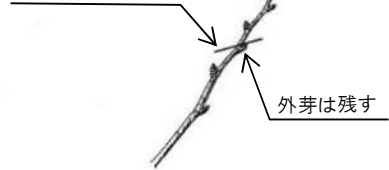
枝の構成や樹冠線を考えて不要な副主枝や側枝を分枝部で切除する。



不要枝の整理

歩道側建築限界
(2.5m)

定芽の上で切除



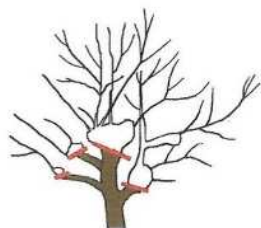
外芽は残す

側枝の切除位置

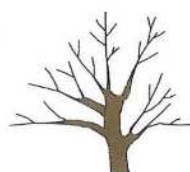
外芽を残し、定芽の真上で切詰める

安全の確保・樹木の健全育成のため、枯枝、からみ枝、逆枝、建築限界を越境している枝などの支障枝は適切に切除する。

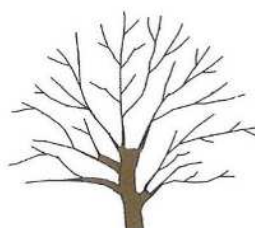
* 頂部の仕立て方



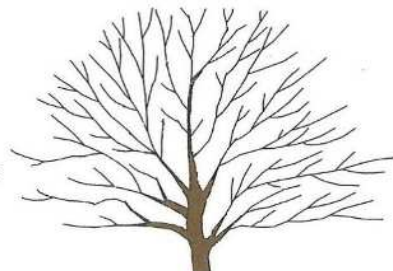
剪定前
(初年度剪定位置)



初年度剪定



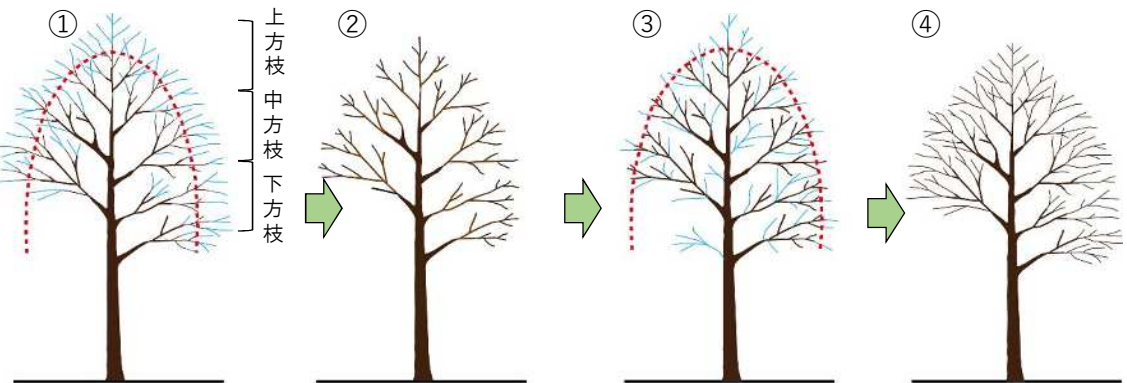
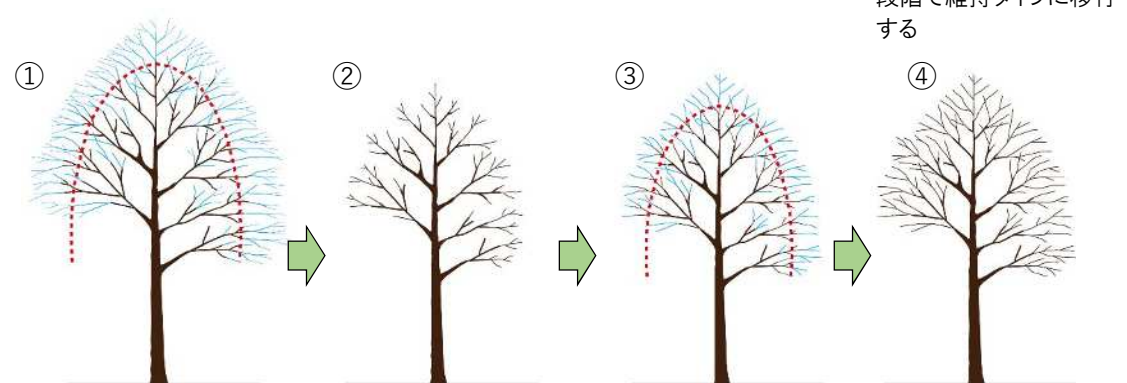
2年目剪定後



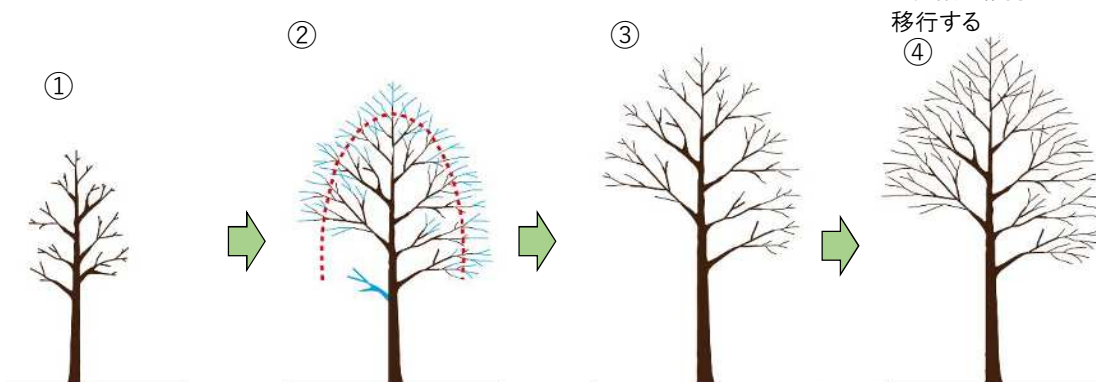
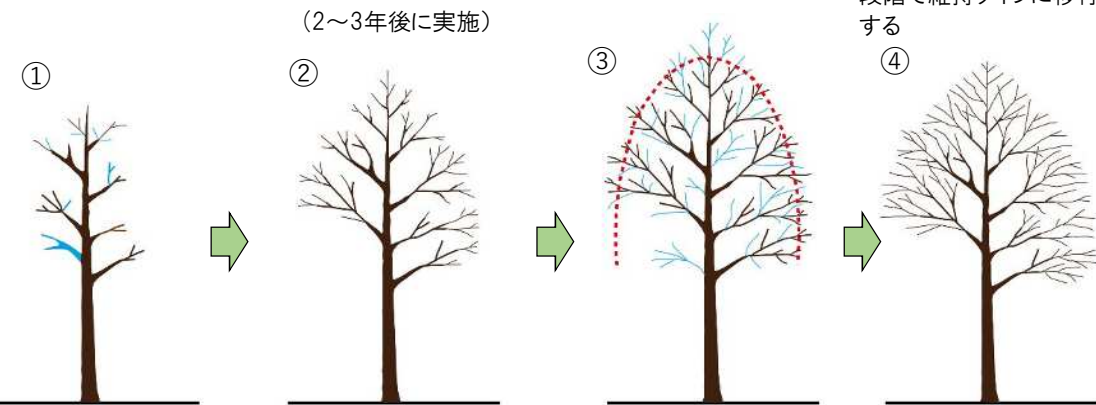
樹冠の仕上がりイメージ

切詰め剪定を繰り返した結果、頂部が「こぶ状」になっている場合、「こぶ」を切除して、頂部をおわんを伏せたような形に柔らかく作り直す。


■樹種別剪定標準計画

樹種	シラカシ
維持タイプ	<p>・生長力、萌芽力ともに強いので樹形を整えやすいが、枝数が多いと内側の枝が日照不足で枯れていくので、枝全体に日照があたるよう細めの枝を間引き、強い枝を強健に育成する。</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな卵円形樹形を作る。 ・頂部優勢を意識して、上方の枝の密度を薄くする。 ・下方枝の切り過ぎに注意して剪定する。 ・枝の伸びしろを考慮して、現状より樹高と枝張をそれぞれ目標樹形よりも小さくなるように剪定する。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・樹形が整えば冬期剪定は1年置き程度でよい。 ・頂部優勢のコントロールと不要枝を除去する剪定を繰り返す。 ・切返し剪定を主体とすれば大きな切り口ができないため、翌年以降も新生枝が著しく発生することは少ない。
縮小タイプ	<p>・対象樹木が目標樹形よりも大きい場合、副主枝の切詰め剪定によって樹形を縮小し、後に萌芽してくる枝を数年かけてコンパクトに整え直していく。</p>  <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p> <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頂部優勢のコントロールを意識し、下方枝の切り過ぎに注意、下方ほど多く枝を残す様に剪定する。 ・残した枝が樹冠線より突出している場合は、側枝を外芽の直上で斜め切りする。 ・やや強い剪定をする場合は、副主枝を切詰め剪定し卵円形に調整する。 ・定芽のない枝はブツ切りにせず切断面を斜め切り、ふところ枝がある場合は、ふところ枝の直上で斜め切りする。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・副主枝を切詰め剪定した枝に複数の新生枝が出ているので、2～3本残して剪定して側枝を育てる。 ・ふところ枝を残して剪定した枝は、新生枝を3～5本残し側枝を育てる。

■樹種別剪定標準計画

樹種	シラカシ
<p>育成 拡大 タイプ</p>	<p>・樹形全体を大きくすることを目指し、将来の骨格を定め、枝のバランス等を考慮しながら育成する。 ・建築限界内の支障枝や込み入った枝等の除去は枝抜き剪定を基本とし、切詰め剪定は最小限にとどめる。 ・立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめる。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・育成を目的として基本的に枝の縮小は行わず、枝抜きによって不要枝を除去し、枝の密度を調整する (切返し剪定、枝おろし剪定)。 ・自然樹形に相似した樹形(卵円形)に整える。</p> <p>②～③ ・頂部優勢を意識しながら切り返し剪定により枝の密度をコントロールする。 ・不要枝を除去する軽微な剪定を基本とし、切り過ぎに注意する。 目標樹形に達するまでは、この剪定を繰り返す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら、維持タイプに移行し、切返し剪定を主体に側枝を整理して柔らかな卵円形樹形をつくる。</p>
<p>【参考】 樹形再生 タイプ</p>	<p>・幹曲がりや片枝など微小剪定で対応できない樹形の悪い樹木は、主枝や幹の梢部を含めて切詰め剪定によって骨格を作り直す。3年から4年の期間が目安。 ・目標樹形を目指した切詰め剪定により枝数の少ない極端な樹形となるため、実施に際しては関係各所との丁寧な調整や説明が必要である。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>(2～3年後に実施)</p> <p>① ・大枝の剪定は、剪定箇所が裂けないよう二段切りとする。 ・主枝を切詰め剪定し、骨格となる枝の長さを調整する。 ・卵円形となるように、また、下方ほど枝数を多く残すよう留意する。</p> <p>②～③ ・外側に向かって素直に伸びた枝を数本残して、不要枝といわれる立枝やからみ枝などを切除する。 ・切り口から萌芽していない場合は、萌芽している部位まで切戻す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら維持タイプに移行し、不要枝の枝抜きと切返し剪定によって樹形を維持する。</p>

■樹種別剪定標準計画

樹種	タブノキ		
管理方向性	<ul style="list-style-type: none"> 沿岸部の風が強い場所に植栽されることが多いので、枝折れや倒伏がないよう、枝を透かして風通しよくする。 緑陰形成と樹冠線を整えることを目的とし、強剪定を避け、剪定は枝透かし程度、緑陰形成と樹冠線を整えることを目的とし、空が少し透けて見える程度に込み入った枝を透かす。 		
剪定時期	夏期：6月～9月頃 酷暑期、強乾燥期は避ける	目標樹形：卵円形 枝張り/樹高比：0.6～	 樹形イメージ
目標樹形の設定	<ul style="list-style-type: none"> 目標樹形は「第2章 1. 管理目標樹形の設定」(P.7～)を参考に設定する。 剪定樹形は樹木の伸長量をもとに決定する。 		

*青色の枝：不要・剪定対象枝を示す

上方枝

外芽を残して定芽の真上で切詰める。
形成する樹形の樹冠線を想像して切り過ぎない。

側枝

副主枝から発生した側枝は切り詰めて樹冠線を整える。
樹冠幅
樹木の中間枝を基本とする。

ふところ枝

副主枝として伸ばし、枝が必要な場所に育成する。
立枝は切除する。

下方枝

少なくなりがちであるため意識的に残すようにする。

車道側建築限界
(4.5m)



コブや胴ぶきから出た枝

- 不定芽の発生防止。
- 樹木の健全育成を図るため、カサの形成を促す適切な位置で切除する。

コブの切断面は平滑に仕上げ、防菌及び癒合促進処理を施す。

頂部

将来、芯となる主枝を伸ばすため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。

全体

主枝—副主枝—側枝のバランスのとれた構成とするため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する
→残した副主枝から発生した側枝を切り詰めて樹冠線を整える。

定芽の上で切除

歩道側建築限界
(2.5m)

枝の構成や樹冠線を考えて不要な副主枝や側枝を分枝部で切除する。

外芽を残す
外芽を残し、定芽の真上で切り詰める。
不要枝の整理

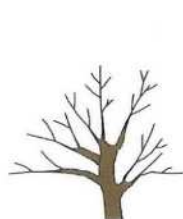
側枝の切除位置

安全の確保・樹木の健全育成のため、枯枝、からみ枝、逆枝、建築限界を越境している枝などの支障枝は適切に切除する。

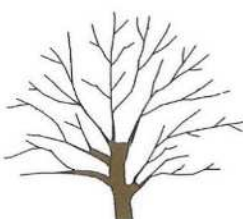
* 頂部の仕立て方



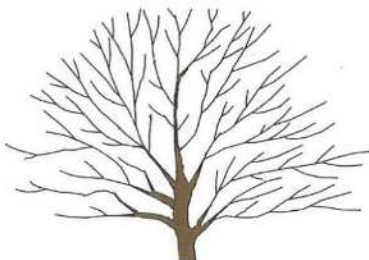
剪定前
(初年度剪定位置)



初年度剪定



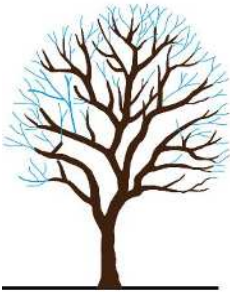
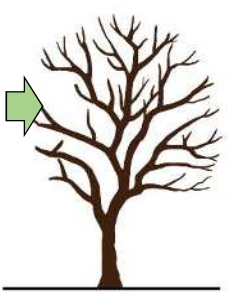


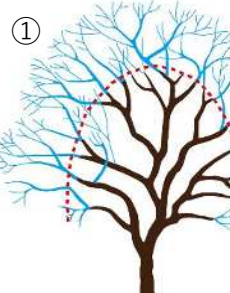
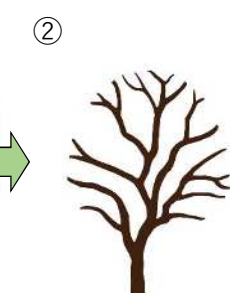
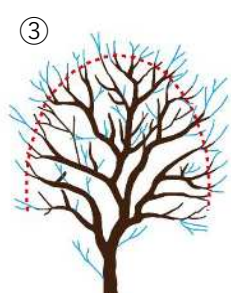
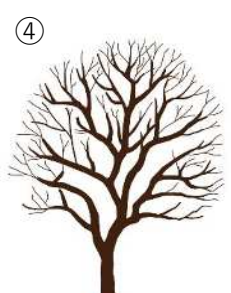
2年目剪定後



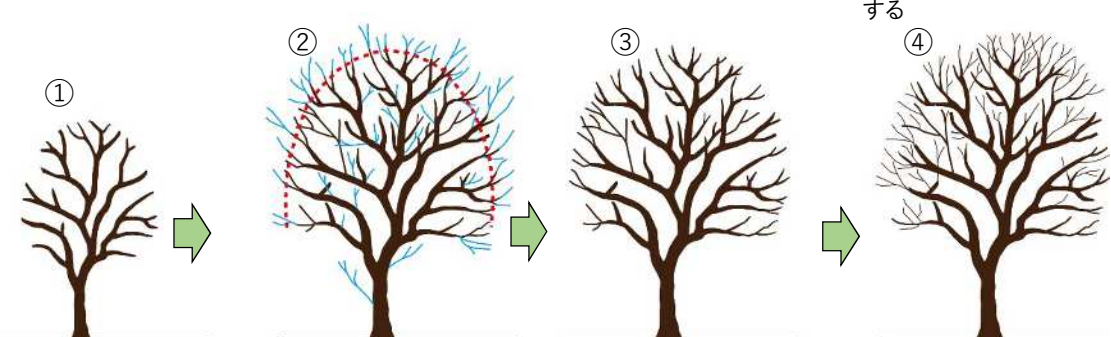
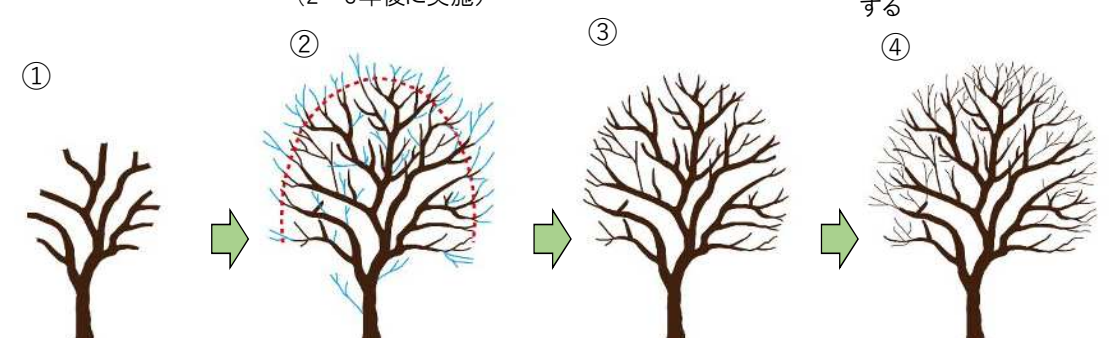
樹冠の仕上がりイメージ

切詰め剪定を繰り返した結果、頂部が「こぶ状」になっている場合、「こぶ」を切除して、頂部をおわんを伏せたような形に柔らかく作り直す。

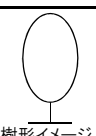
■樹種別剪定標準計画

樹種	タブノキ
維持タイプ	<p>・平均高に合わせ、側枝と一部の副主枝の切返し剪定によって樹形を維持する。 ・切返し剪定を継続し、それに適した枝がない場合は、部分的に副主枝を切詰め剪定し、側枝を再生させる。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>①</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>②</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>③</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>④</p>  </div> </div> <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな卵円形樹形を作る。 ・頂部優勢を意識して、上方の枝の密度を薄くする。 ・下方枝の切り過ぎに注意して剪定する。 ・枝の伸びしろを考慮して、現状より樹高と枝張をそれぞれ目標樹形よりも小さくなるように剪定する。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・樹形が整えば剪定は2年置き程度でよいが、狭い空間でコンパクトに維持するには隔年に行う。 ・頂部優勢のコントロールと不要枝を除去する剪定を繰り返す。 ・切返し剪定を主体とすれば大きな切り口ができないため、翌年以降も新生枝が著しく発生することは少ない。
縮小タイプ	<p>・対象樹木が目標樹形よりも大きい場合、副主枝の切詰め剪定によって樹形を縮小し、後に萌芽してくる枝を数年かけてコンパクトに整え直していく。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>①</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>②</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>③</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>④</p>  </div> </div> <p style="text-align: right;">概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p> <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頂部優勢のコントロールを意識し、下方枝の切り過ぎに注意、下方ほど多く枝を残す様に剪定する。 ・残した枝が樹冠線より突出している場合は、側枝を外芽の直上で斜め切りする。 ・やや強い剪定をする場合は、副主枝を切詰め剪定し卵円形に調整する。 ・定芽のない枝はブツ切りにせず切断面を斜め切り、ふところ枝がある場合は、ふところ枝の直上で斜め切りする。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・副主枝を切詰め剪定した枝に複数の新生枝が出ているので、2～3本残して剪定して側枝を育てる。 ・ふところ枝を残して剪定した枝は、新生枝を3～5本残し側枝を育てる。

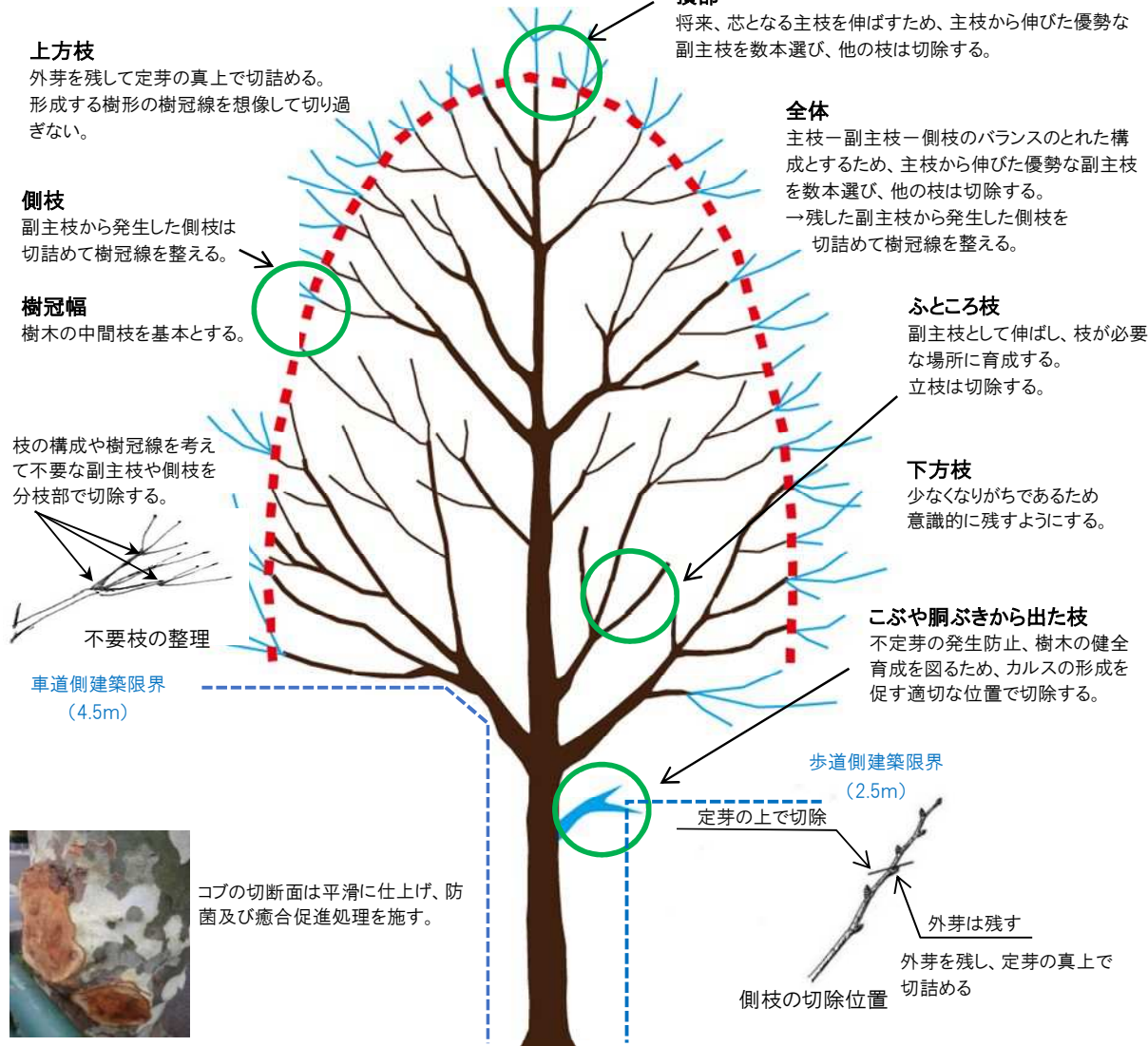
■樹種別剪定標準計画

樹種	タブノキ
<p>育成拡大タイプ</p>	<p>・樹形全体を大きくすることを目指し、将来の骨格を定め、枝のバランス等を考慮しながら育成する。 ・建築限界内の支障枝や込み入った枝等の除去は枝抜き剪定を基本とし、切詰め剪定は最小限にとどめる。 ・立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめる。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・育成を目的として基本的に枝の縮小は行わず、枝抜きによって不要枝を除去し、枝の密度を調整する（切返し剪定、枝おろし剪定）。 ・自然樹形に相似した樹形(卵円形)に整える。</p> <p>②～③ ・頂部優勢を意識しながら切返し剪定により枝の密度をコントロールする。 ・不要枝を除去する軽微な剪定を基本とし、切り過ぎに注意する。 ・目標樹形に達するまでは、この剪定を繰り返す行う。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら、維持タイプに移行し、切返し剪定を主体に側枝を整理して柔らかな卵円形樹形をつくる。</p>
<p>【参考】樹形再生タイプ</p>	<p>・幹曲がりや片枝など微小剪定で対応できない樹形の悪い樹木は、主枝や幹の梢部を含めて切詰め剪定によって骨格を作り直す。3～4年の期間が目安。 ・目標樹形を目指した切詰め剪定により枝数の少ない極端な樹形となるため、実施に際しては関係各所との丁寧な調整や説明が必要である。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p> <p>(2～3年後に実施)</p>  <p>① ・大枝の剪定は、剪定箇所が裂けないよう二段切りとする。 ・大枝の切り口は斜め切りにし、防菌及び癒合促進処理を施す。 ・主枝を切詰め剪定し、骨格となる枝の長さを調整する。 ・卵円形となるように、また、下方ほど枝数を多く残すことに留意する。</p> <p>②～③ ・常緑樹は落葉樹に比べて枝数も少なくほとんど伸びないので、外側に向かって素直に伸びた枝を数本残して、不要枝といわれる立枝やからみ枝などを切除する。 ・切り口から萌芽していない場合は、萌芽している部位まで切戻す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら維持タイプに移行し、不要枝の枝抜きと切返し剪定によって樹形を維持する。</p>

■樹種別剪定標準計画

樹種	アオギリ		
管理方向性	<ul style="list-style-type: none"> ・枝数が少なく、樹形を整えることが難しいので、将来の樹形や枝構成を見据えて枝の要不要を見定め、剪定する。 ・概ね卵円形の樹形となるよう、枝抜きと切返し剪定により、主枝、副枝、側枝から成るバランスの取れた枝構成を目指す。 		
剪定時期	冬期：12月～2月頃	目標樹形：卵円形 枝張り/樹高比：0.5～	 樹形イメージ
目標樹形の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・目標樹形は「第2章 1. 管理目標樹形の設定」(P.7～)を参考に設定する。 ・剪定樹形は樹木の伸長量をもとに決定する。 		

*青色の枝：不要・剪定対象枝を示す



上方枝
外芽を残して定芽の真上で切詰める。形成する樹形の樹冠線を想像して切り過ぎない。

側枝
副主枝から発生した側枝は切詰めて樹冠線を整える。

樹冠幅
樹木の間中枝を基本とする。

頂部
将来、芯となる主枝を伸ばすため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。

全体
主枝—副主枝—側枝のバランスのとれた構成とするため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。
→残した副主枝から発生した側枝を切詰めて樹冠線を整える。

ふところ枝
副主枝として伸ばし、枝が必要な場所に育成する。立枝は切除する。

下方枝
少なくなりがちであるため意識的に残すようにする。

こぶや胴ぶきから出た枝
不定芽の発生防止、樹木の健全育成を図るため、カサの形成を促す適切な位置で切除する。

不要枝の整理
枝の構成や樹冠線を考えて不要な副主枝や側枝を分枝部で切除する。

車道側建築限界 (4.5m)

歩道側建築限界 (2.5m)

定芽の上で切除

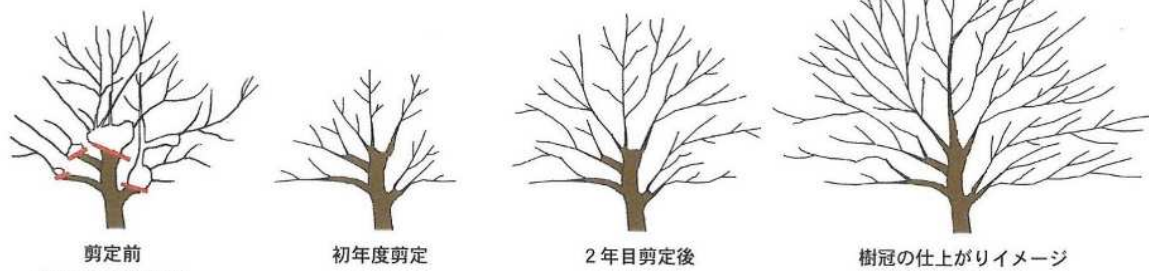
外芽は残す
外芽を残し、定芽の真上で切詰める

側枝の切除位置

コブの切断面は平滑に仕上げ、防菌及び癒合促進処理を施す。

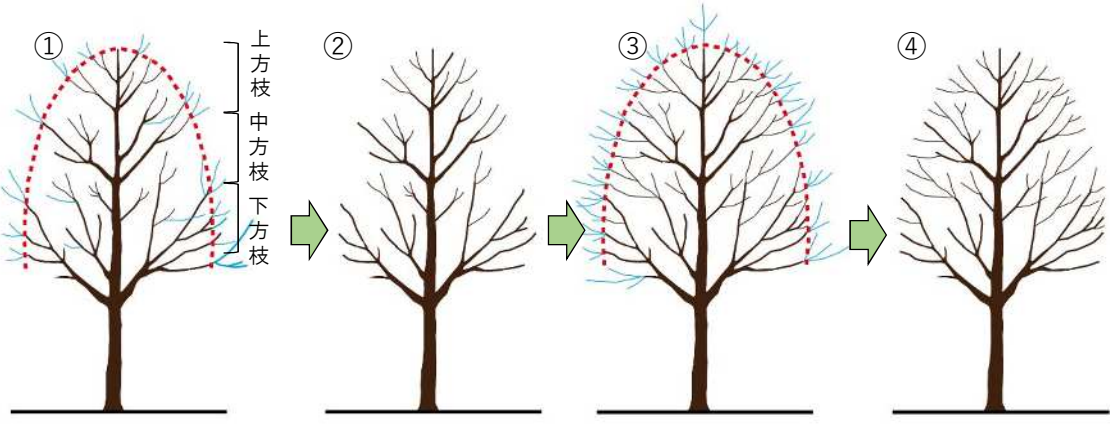
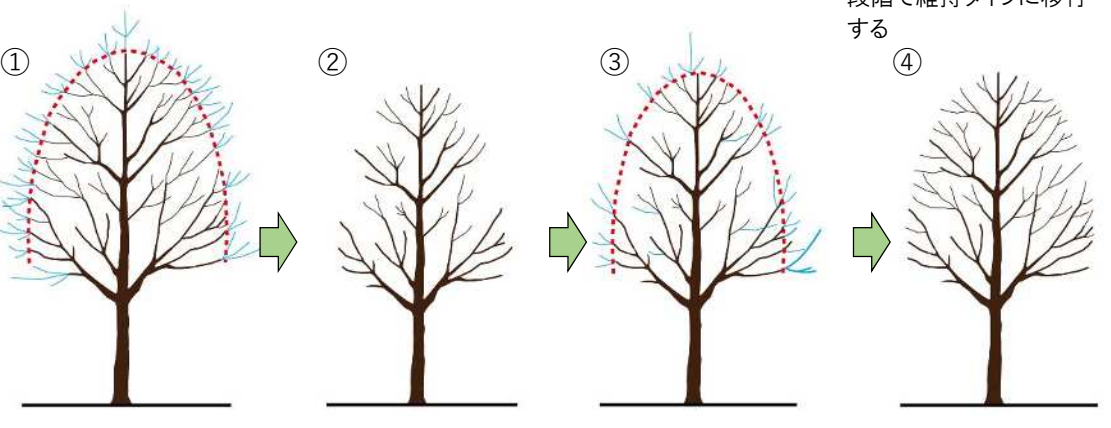
安全の確保・樹木の健全育成のため、枯枝、からみ枝、逆枝、建築限界を越境している枝などの支障枝は適切に切除する。

* 頂部の仕立て方

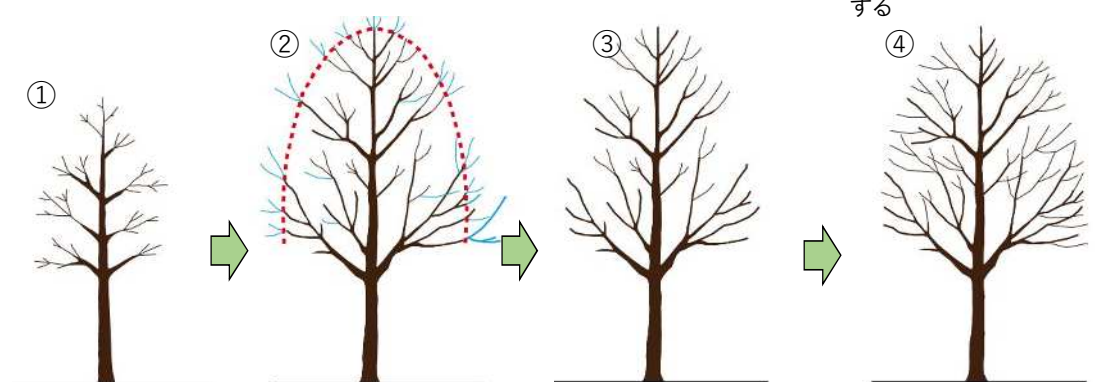
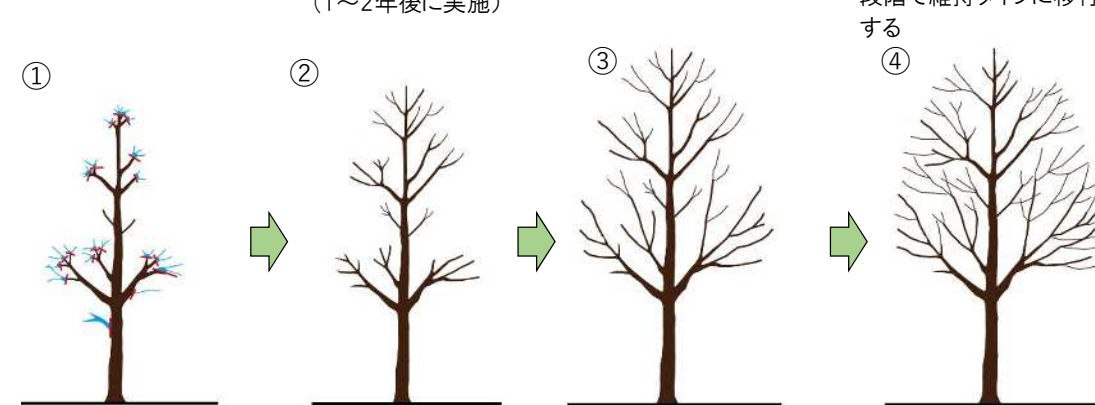


卵円形樹形に仕立てるのが一般的だが、切詰め剪定を繰り返した結果、頂部が「こぶ状」になっている場合、「こぶ」を切除して、頂部をおわんを伏せたような形に柔らかく作り直す。

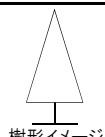
■樹種別剪定標準計画

樹種	アオギリ
維持タイプ	<p>・枝数が少なく、輪生しており、樹形を整えることが難しいので、将来の樹形や枝構成を見据えて枝の不要を見定め、剪定する。</p> <p>・剪定後の芽吹きが遅く、1年後に萌芽することもあるので、枯死の判断を早まらないよう留意する。</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな卵円形樹形を作る。 ・頂部優勢を意識して、上方の枝の密度を薄くする。 ・下方枝の切り過ぎに注意して剪定する。 ・枝の伸びしろを考慮して、現状より樹高と枝張がそれぞれ目標樹形よりも小さくなるように剪定する。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・樹形が整えば冬期剪定は1年置き程度でよい。 ・頂部優勢のコントロールと不要枝を除去する剪定を繰り返す。 ・切返し剪定を主体とすれば大きな切り口ができないため、翌年以降も新生枝が著しく発生することは少ない。
縮小タイプ	<p>・対象樹木が目標樹形よりも大きい場合、副主枝の切詰め剪定によって樹形を縮小し、後に萌芽してくる枝を数年かけてコンパクトに整え直していく。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頂部優勢のコントロールを意識し、下方枝の切り過ぎに注意、下方ほど多く枝を残す様に剪定する。 ・残した枝が樹冠線より突出している場合は、側枝を外芽の直上で斜め切りする。 ・やや強い剪定をする場合は、副主枝を切詰め剪定し卵円形に調整する。 ・定芽のない枝はブツ切りにせず切断面を斜め切り、ふところ枝がある場合は、ふところ枝の直上で斜め切りする。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・副主枝を切詰め剪定した枝に複数の新生枝が出ているので、2～3本残して剪定して側枝を育てる。 ・ふところ枝を残して剪定した枝は、新生枝を3～5本残し側枝を育てる。

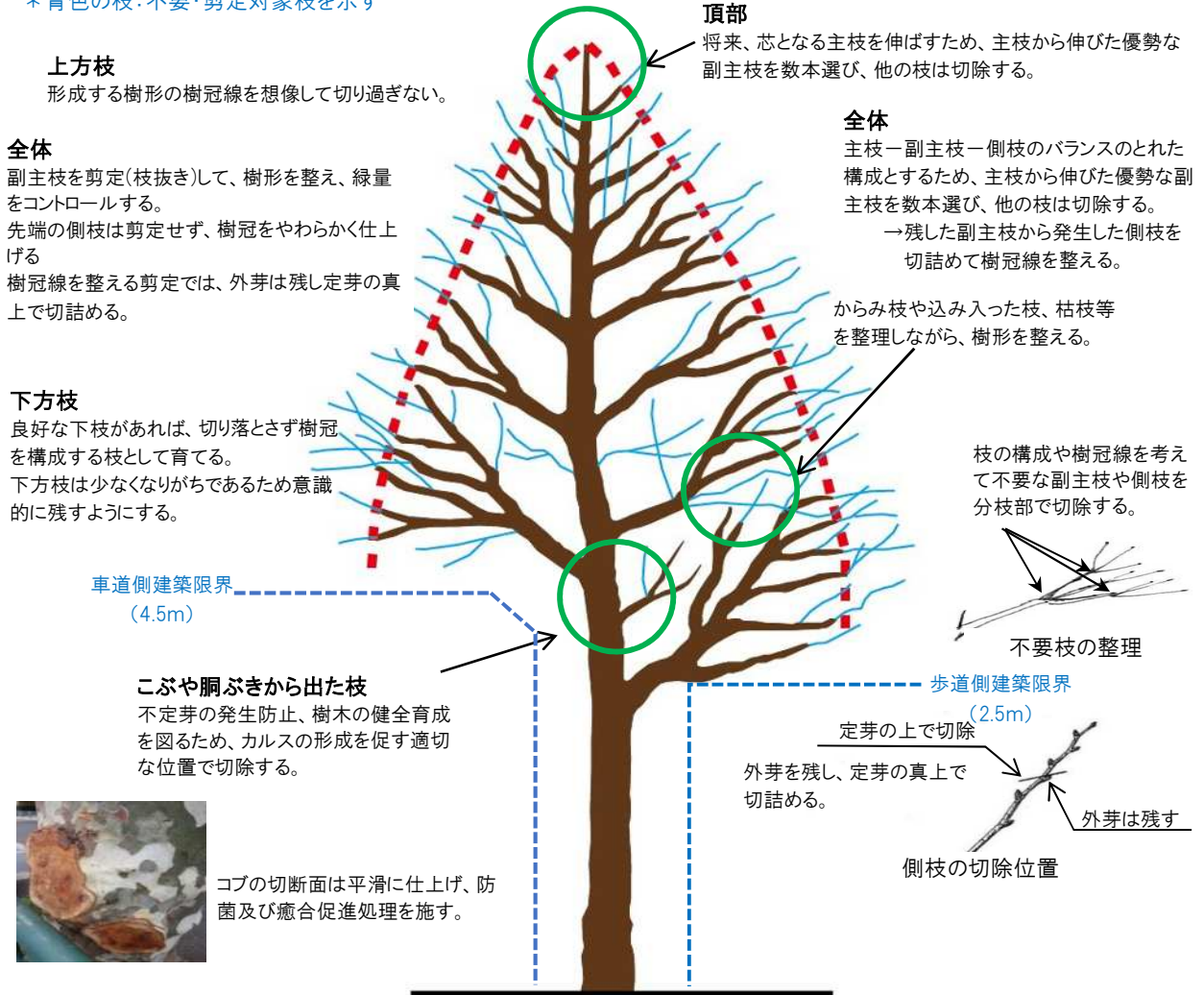
■樹種別剪定標準計画

樹種	アオギリ
<p>育成 拡大 タイプ</p>	<p>・樹形全体を大きくすることを目指し、将来の骨格を定め、枝のバランス等を考慮しながら育成する。 ・建築限界内の支障枝や込み入った枝等の除去は枝抜き剪定を基本とし、切詰め剪定は最小限にとどめる。 ・立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめる。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・育成を目的として基本的に枝の縮小は行わず、枝抜きによって不要枝を除去し、枝の密度を調整する（切返し剪定、枝おろし剪定）。 ・自然樹形に相似した樹形（卵円形）に整える。</p> <p>②～③ ・頂部優勢を意識しながら切返し剪定により枝の密度をコントロールする。 ・不要枝を除去する軽微な剪定を基本とし、切り過ぎに注意する。目標樹形に達するまでは、この剪定を繰り返す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら維持タイプに移行し、切返し剪定を主体に側枝を整理して柔らかな卵円形樹形をつくる。</p>
<p>【参考】 樹形再生 タイプ</p>	<p>・幹曲がりや片枝など微小剪定で対応できない樹形の悪い樹木は、主枝や幹の梢部を含めて切詰め剪定を行い骨格を作り直す。 ・目標樹形を目指した切詰め剪定により枝数の少ない極端な樹形となるため、実施に際しては関係各所との丁寧な調整や説明が必要である。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p> <p>(1～2年後に実施)</p>  <p>① ・大枝の剪定は、剪定箇所が裂けないよう二段切りとする。 ・主枝を切詰め剪定し、骨格となる枝の長さを調整する。 ・卵円形となるように、また、下方ほど枝数を多く残すよう留意する。</p> <p>②～③ ・外側に向かって素直に伸びた枝を数本残して、不要枝といわれる立枝やからみ枝などを切除する。 ・切り口から萌芽していない場合は、萌芽している部位まで切戻す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら維持タイプに移行し、不要枝の枝抜きと切返し剪定によって樹形を維持する。</p>

■樹種別剪定標準計画

樹種	イチヨウ		
管理方向性	<ul style="list-style-type: none"> ・枝先につくらぬよう、長く伸びた枝を短い枝に切り返して樹形を作る。 ・芯を育てて大きくしながら、将来的に骨格を形成する副主枝を作り、主枝—副主枝—側枝で構成された樹冠の形成を図る。 		
剪定時期	冬期：12月～2月頃	目標樹形：円錐形 枝張り/樹高比：0.4～	 <p>樹形イメージ</p>
目標樹形の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・目標樹形は「第2章 1. 管理目標樹形の設定」(P.7～)を参考に設定する。 ・剪定樹形は樹木の伸長量をもとに決定する。 		

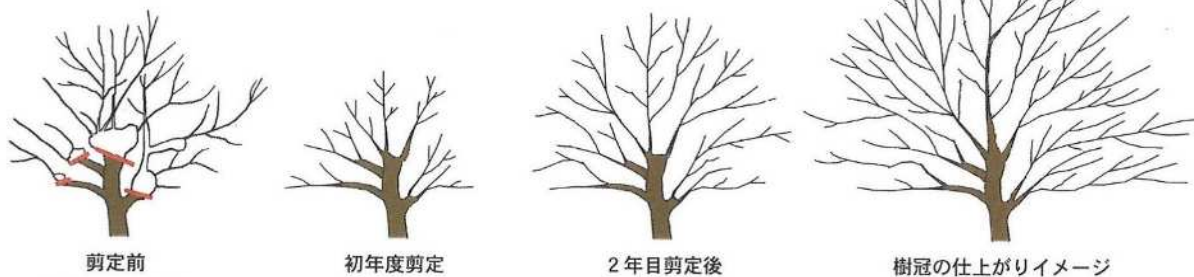
*青色の枝：不要・剪定対象枝を示す



主枝が太く生長するよう、切返し剪定と枝ふかしを繰り返しながら、細い枝をしっかり育てる。
安全の確保・樹木の健全育成のため、枯枝、からみ枝、逆枝、建築限界を越境している枝などの支障枝は適切に切除する。

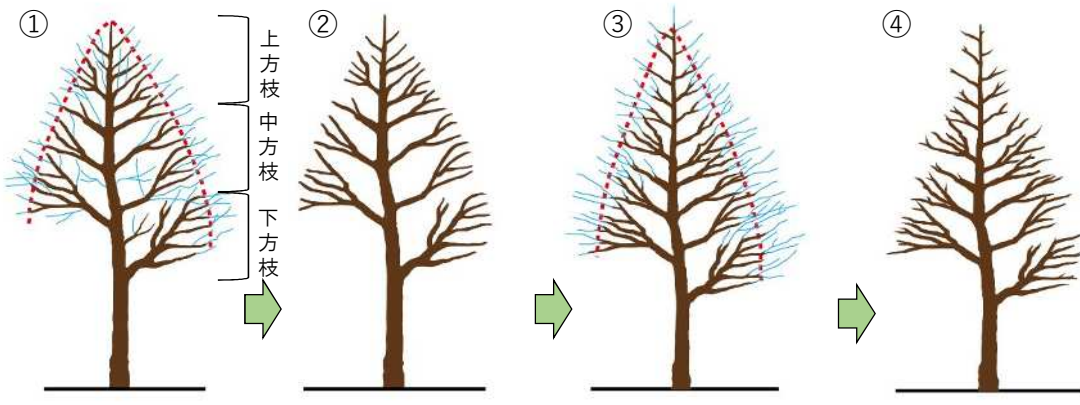
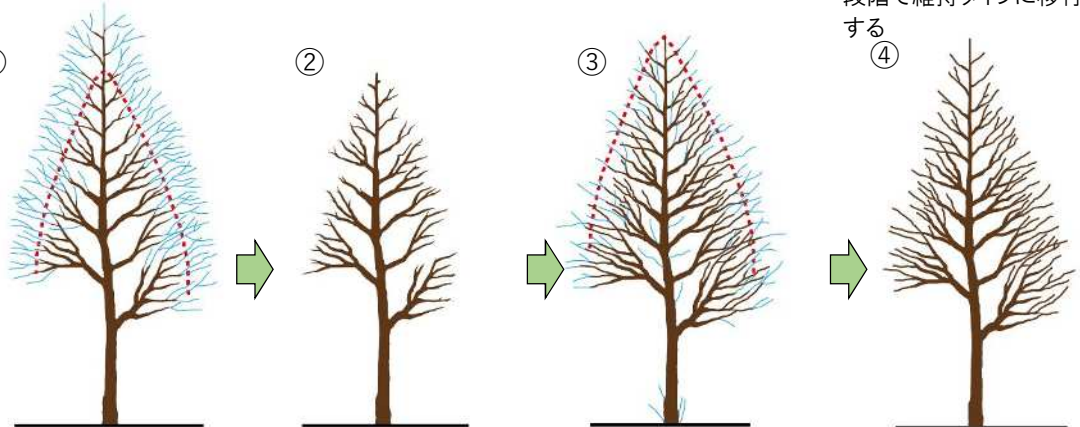
※イチヨウの目標樹形について、街路樹の樹冠拡大を目指した維持管理計画等では広卵形として設定したが、樹種別剪定標準計画では自然樹形に近い円錐形として設定する。

* 頂部の仕立て方

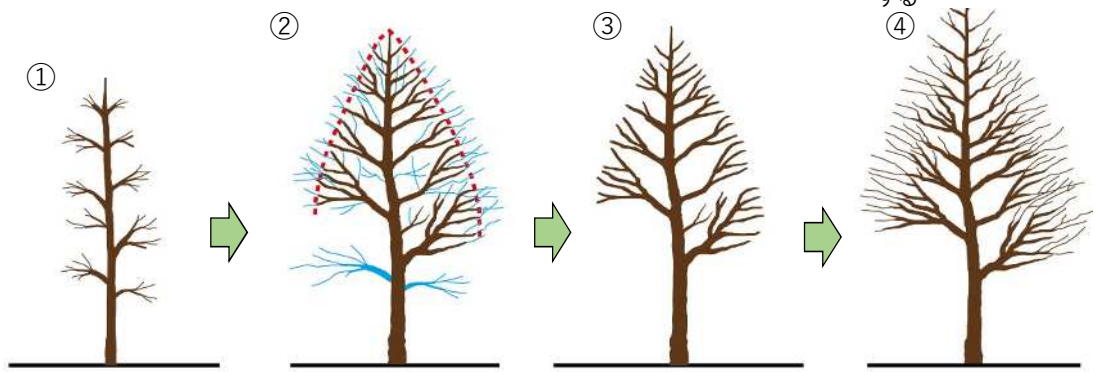
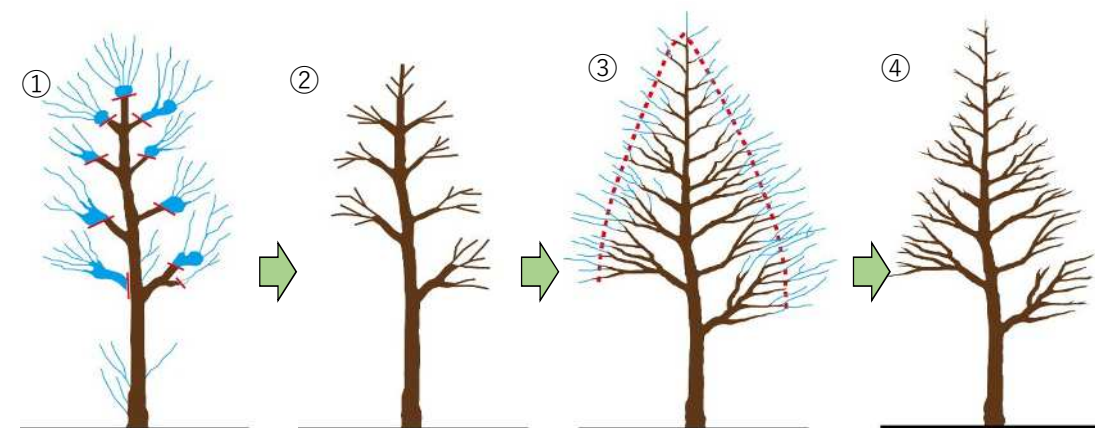


切詰め剪定を繰り返した結果、頂部が「こぶ状」になっている場合、「こぶ」を切除して、頂部をおわんを伏せたような形に柔らかく作り直す。

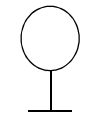
■樹種別剪定標準計画

樹種	イチヨウ
維持タイプ	<p>・枝葉のバランスを良くするため、対生する枝の一方を切り落として互生状に仕立て、手を広げたように主枝・副主枝・側枝をつくりこみ、柔らかな樹形とする。</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切返し剪定を主体に側枝を整理し、円錐形樹形を作る。 ・頂部優勢を意識して、上方の枝の密度を薄くする。 ・下方枝の切り過ぎに注意して剪定する。 ・枝の伸びしろを考慮して、現状より樹高と枝張をそれぞれ目標樹形よりも小さくなるように剪定する。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頂部優勢のコントロールと不要枝を除去する剪定を繰り返す。 ・切返し剪定を主体とすると大きな切り口ができないため、翌年以降も新生枝が著しく発生することは少ない。
縮小タイプ	<p>・副主枝の切詰め剪定によって縮小した後に萌芽してくる枝を数年にかけてコンパクトに整え直す。</p> <p>・対象樹木が目標樹形よりもやや大きい場合はその全体を、並木の一部分が突出して大きいものは、平均高に合わせ、やや強度の剪定によって樹形を縮小する。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頂部優勢のコントロールを意識し、下方枝の切り過ぎに注意して下方ほど多く枝を残す様に剪定する。 ・残した枝が樹冠線より突出している場合は、側枝を外芽の直上で斜め切りする。 ・やや強い剪定をする場合は、副主枝を切詰め剪定し円錐形に調整する。 ・定芽ない枝の剪定は切断面を斜めにカットし、ブツ切りしない。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・副主枝を切詰め剪定した枝に複数の新生枝が出ていたので、2～3本残して剪定して側枝を育てる。 ・ふところ枝を残して剪定した枝は、新生枝を3～5本残し側枝を育てる。

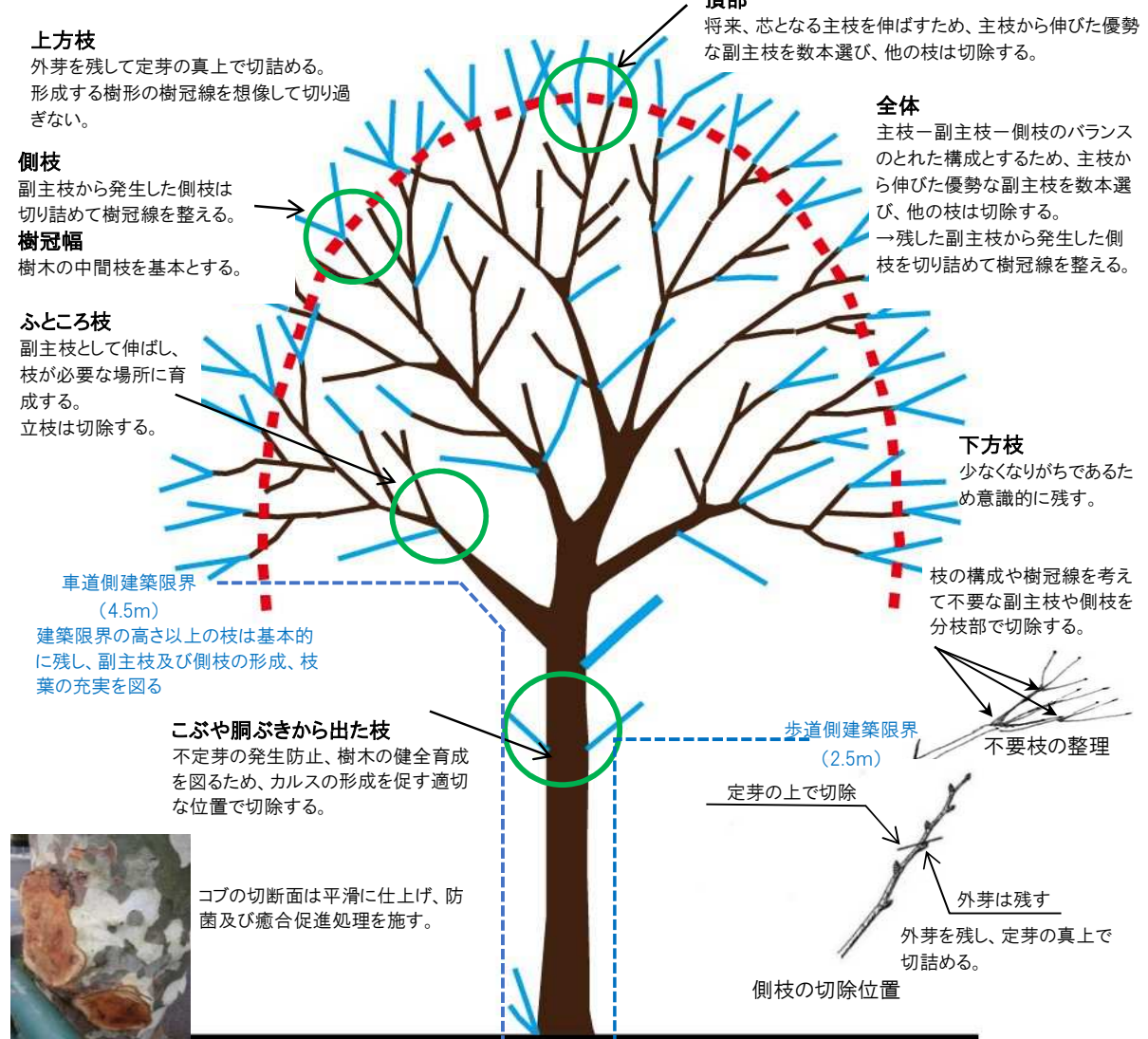
■樹種別剪定標準計画

樹種	イチョウ
<p>育成拡大タイプ</p>	<p>・樹形全体を大きくすることを目指し、将来の骨格を定め、枝のバランス等を考慮しながら育成する。 ・建築限界内の支障枝や込み入った枝等の除去は枝抜き剪定を基本とし、切詰剪定は最小限にとどめる。 ・立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめる。 概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・育成を目的として基本的に枝の縮小は行わず、枝抜きによって不要枝を除去し、枝の密度を調整する (繰り返し剪定、枝おろし剪定)。 ・自然樹形に相似した樹形(円錐形)に整える。</p> <p>②～③ ・頂部優勢を意識しながら繰り返し剪定により枝の密度をコントロールする。 ・基本的に不要枝を除去する軽微な剪定を行い、切り過ぎに注意する。 目標樹形に達するまでは、この剪定を繰り返す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら、維持タイプに移行して、切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな円錐形樹形をつくる。</p>
<p>【参考】樹形再生タイプ</p>	<p>・幹曲がりや片枝など剪定で対応できない樹形の悪い樹木は、主枝や幹の梢部を含めて切詰め剪定によって骨格を作り直す。 ・目標樹形を目指した切詰め剪定により枝数の少ない極端な樹形となるため、実施に際しては関係各所との丁寧な調整や説明が必要である。 概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p> <p>(1～2年後に実施)</p>  <p>① ・大枝の剪定時には、二段切りとし、裂けに注意して剪定を行う。 ・主枝を切詰剪定し、骨格となる枝の長さを調整する。 ・円錐形樹形となるように、また、下方ほど枝数を多く残すことに留意する。</p> <p>②～③ ・外側に向かって素直に伸びた枝を数本残して、不要枝といわれる立枝やからみ枝などを切除する。 ・切り口から萌芽していない場合は萌芽している部位まで切戻す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら不要枝の枝抜きと切返し剪定によって、樹形を維持する。 →維持タイプに移行する。</p>

■樹種別剪定標準計画

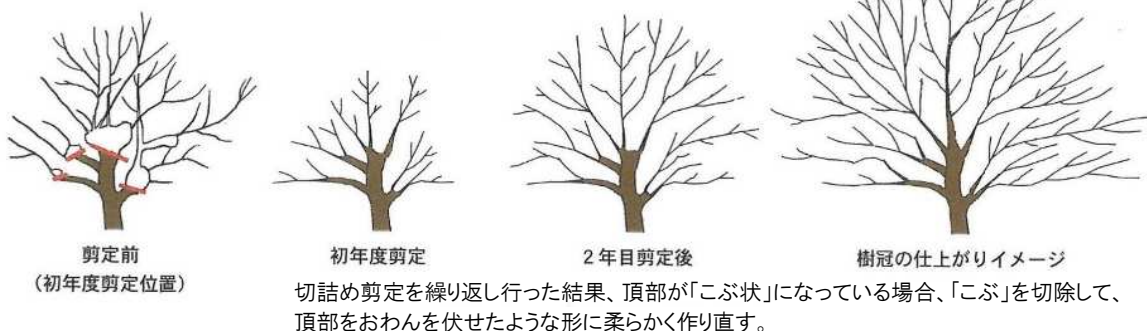
樹種	エンジュ		
管理方向性	・概ね球形の樹形となるよう、枝抜きと切返し剪定により、主枝、副枝、側枝から構成されたバランスの取れた枝構成を目指す。		
剪定時期	冬期：12月～2月頃	目標樹形：球形 枝張り/樹高比：0.5～	 樹形イメージ
目標樹形の設定	・目標樹形は「第2章 1. 管理目標樹形の設定」(P.7～)を参考に設定する。 ・剪定樹形は樹木の伸長量をもとに決定する。		

*青色の枝：不要・剪定対象枝を示す

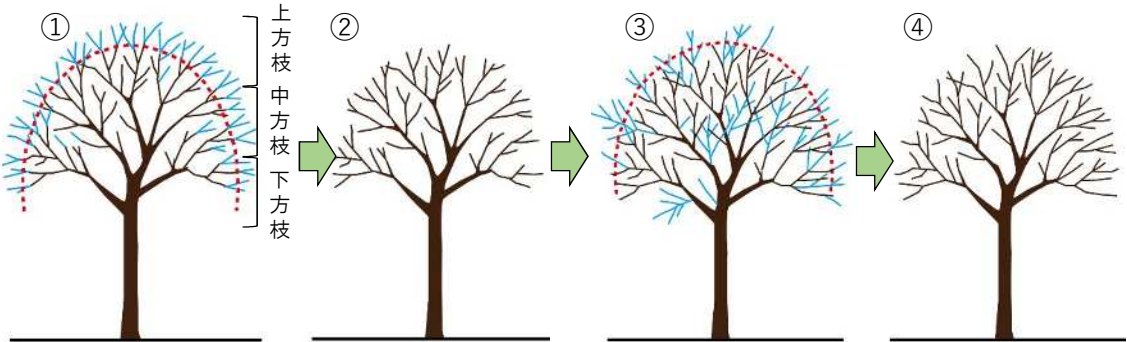
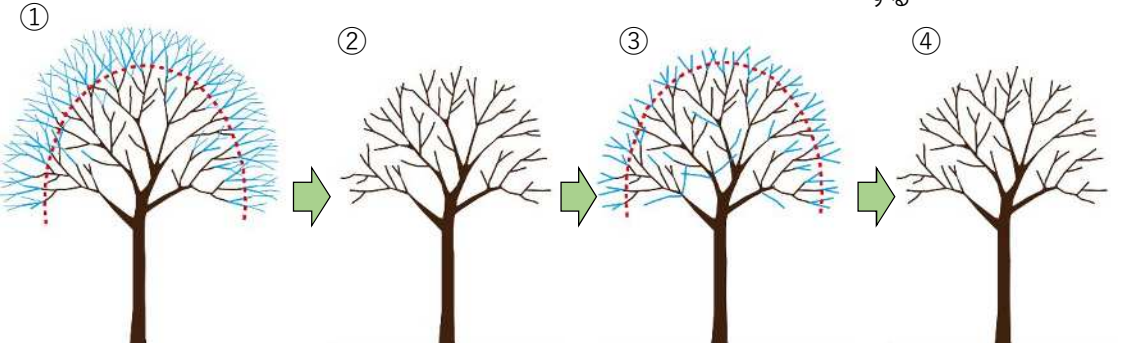


安全の確保・樹木の健全育成のため、枯枝、からみ枝、逆枝、建築限界を越境している枝などの支障枝は適切に切除する。

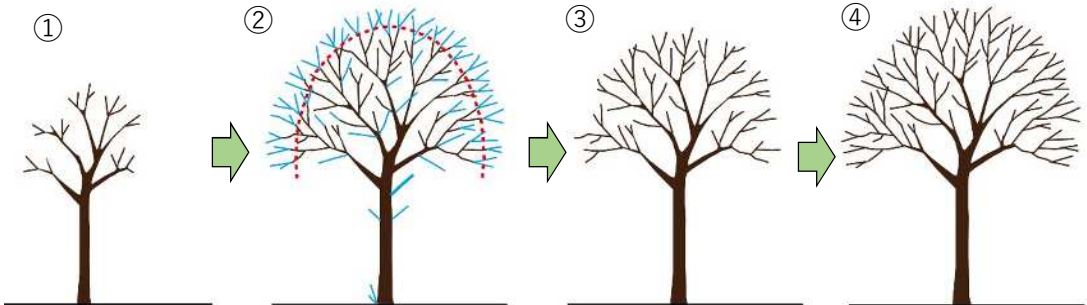
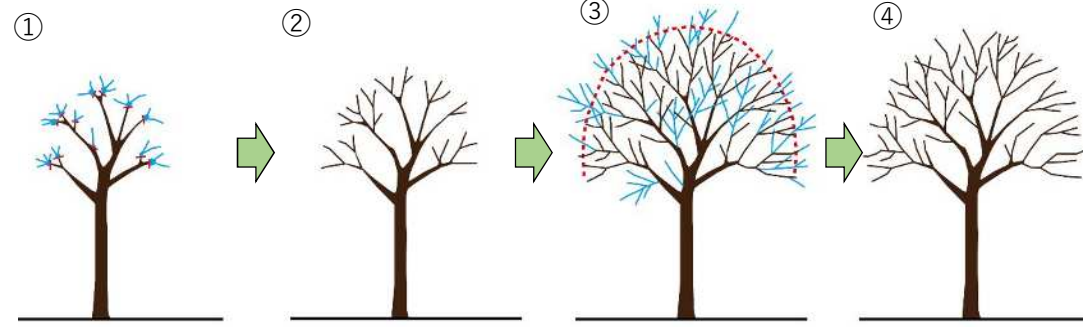
* 頂部の仕立て方



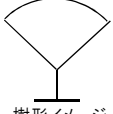
■樹種別剪定標準計画

樹種	エンジュ
維持タイプ	<p>・切返しによって樹形を矯正しやすいが、コンパクトな樹形を維持するには毎年の剪定が必要である。</p> <p>・同じ位置で剪定を繰り返すと、コブ状になって見苦しく、腐朽の原因にもなるので、適宜切戻して樹形を整える。</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな球形を作る。 ・頂部優勢を意識して、上方の枝の密度を薄くする。 ・下方枝の切り過ぎに注意して剪定する。 ・枝の伸びしろを考慮して、現状より樹高と枝張りがそれぞれ目標樹形よりも小さくなるように剪定する。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンパクトな樹形を維持するには毎年の剪定が必要。 ・頂部優勢のコントロールと不要枝を除去する剪定を繰り返す。 ・切返し剪定を主体とすれば大きな切り口ができないため、翌年以降も新生枝が著しく発生することは少ない。
縮小タイプ	<p>・対象樹木が目標樹形よりも大きい場合、副主枝の切詰め剪定によって樹形を縮小し、後に萌芽してくる枝を数年かけてコンパクトに整え直していく。</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頂部優勢のコントロールを意識し、下方枝の切り過ぎに注意、下方ほど多く枝を残す様に剪定する。 ・残した枝が樹冠線より突出している場合は、側枝を外芽の直上で斜め切りする。 ・やや強い剪定をする場合は、副主枝を切詰め剪定し球形に調整する。 ・定芽のない枝はブツ切りにせず切断面を斜め切り、ふところ枝がある場合は、ふところ枝の直上で斜め切りする。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・副主枝を切詰め剪定した枝に複数の新生枝が出ているので、2～3本残して剪定して側枝を育てる。 ・ふところ枝を残して剪定した枝は、新生枝を3～5本残し側枝を育てる。 <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>

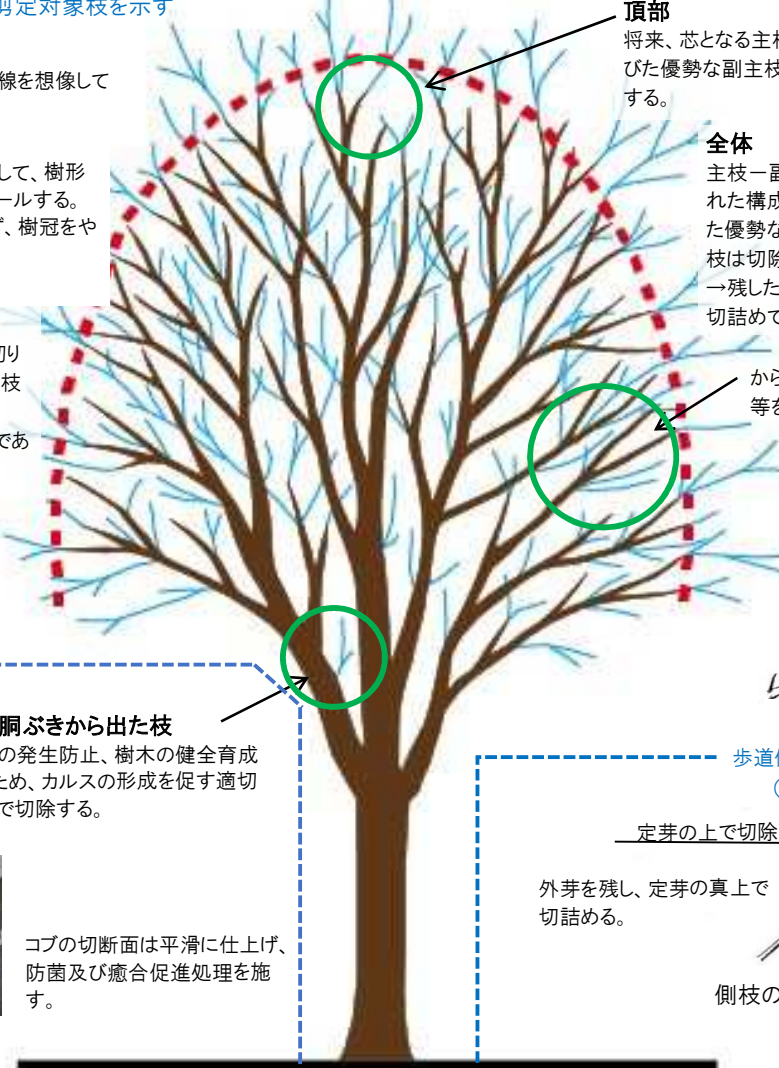
■樹種別剪定標準計画

樹種	エンジュ
<p>育成拡大タイプ</p>	<p>・樹形全体を大きくすることを目指し、将来の骨格を定め、枝のバランス等を考慮しながら育成する。</p> <p>・建築限界内の支障枝や込み入った枝等の除去は枝抜き剪定を基本とし、切詰め剪定は最小限にとどめる。</p> <p>・立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめる。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・育成を目的として基本的に枝の縮小は行わず、枝抜きによって不要枝を除去し、枝の密度を調整する（切返し剪定、枝おろし剪定）。 ・自然樹形に相似した樹形（球形）に整える。</p> <p>②～③ ・頂部優勢を意識しながら切返し剪定により枝の密度をコントロールする。 ・不要枝を除去する軽微な剪定を基本とし、切り過ぎに注意する。 目標樹形に達するまでは、この剪定を繰り返し行う。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら、維持タイプに移行し、切返し剪定を主体に側枝を整理して柔らかな球形の樹形をつくる。</p>
<p>【参考】樹形再生タイプ</p>	<p>・幹曲がりや片枝など微小剪定で対応できない樹形の悪い樹木は、主枝や幹の梢部を含めて切詰め剪定を行い、骨格を作り直す。</p> <p>・目標樹形を目指した切詰め剪定により枝数の少ない極端な樹形となるため、実施に際しては関係各所との丁寧な調整や説明が必要である。</p> <p>(1～2年後に実施)</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・大枝の剪定は、剪定箇所が裂けないよう二段切りとする。 ・主枝を切詰め剪定し、骨格となる枝の長さを調整する。 ・球形となるように、また、下方ほど枝数を多く残すことに留意する。</p> <p>②～③ ・外側に向かって素直に伸びた枝を数本残して、不要枝といわれる立枝やからみ枝などを切除する。 ・切り口から萌芽していない場合は、萌芽している部位まで切戻す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら維持タイプに移行し、不要枝の枝抜きと切返し剪定によって樹形を維持する。</p>

■樹種別剪定標準計画

樹種	ケヤキ		
管理方向性	<ul style="list-style-type: none"> ・樹冠内の混んだ枝を整理し、概ね盃形になるよう形を整える。 ・緑陰を確保するため、切りすぎに注意する。 ・主枝は将来の建築限界越境を予測して、分枝の高さによって大枝になる前に切除する。 		
剪定期期	冬期：12月～2月頃	目標樹形：盃形 枝張り/樹高比：0.7～	 樹形イメージ
目標樹形の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・目標樹形は「第2章 1. 管理目標樹形の設定」(P.7～)を参考に設定する。 ・剪定樹形は樹木の伸長量をもとに決定する。 		

* 青色の枝：不要・剪定対象枝を示す



上方枝
形成する樹形の樹冠線を想像して切り過ぎない。

全体
副主枝を剪定(枝抜き)して、樹形を整えて緑量をコントロールする。先端の側枝は剪定せず、樹冠をやわらかく仕上げる。

下方枝
良好な下枝があれば、切り落とさず樹冠を構成する枝として育てる。下方枝は少なくなりがちであるため意識的に残す。

頂部
将来、芯となる主枝を伸ばすため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。

全体
主枝一副主枝一側枝のバランスのとれた構成とするため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。
→残した副主枝から発生した側枝を切詰めて樹冠線を整える

からみ枝や込み入った枝、枯枝等を整理しながら、樹形を整える。

枝の構成や樹冠線を考えて不要な副主枝や側枝を分枝部で切除する

不要枝の整理

車道側建築限界 (4.5m)

こぶや胴ぶきから出た枝
不定芽の発生防止、樹木の健全育成を図るため、カサの形成を促す適切な位置で切除する。

歩道側建築限界 (2.5m)

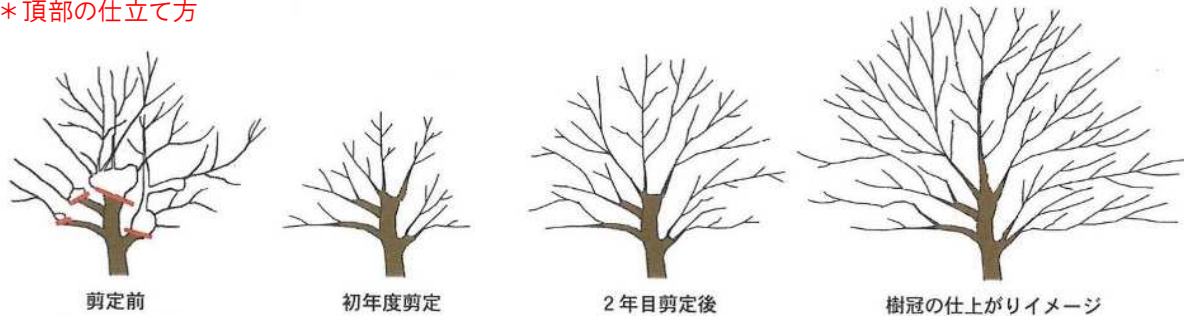
定芽の上で切除
外芽を残し、定芽の真上で切詰める。
外芽は残す

側枝の切除位置

コブの切断面は平滑に仕上げ、防菌及び癒合促進処理を施す。

主枝が太く生長するよう、切返し剪定と枝ふかしを繰り返す。
安全の確保・樹木の健全育成のため、枯枝、からみ枝、逆枝、建築限界を越境している枝などの支障枝は適切に切除する。

* 頂部の仕立て方

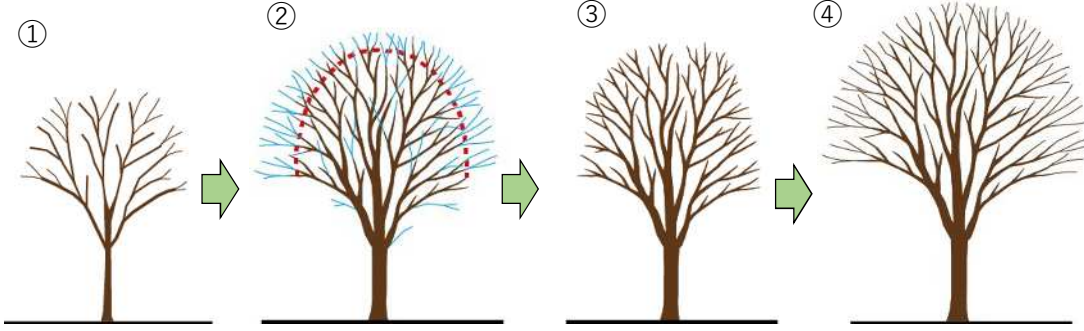
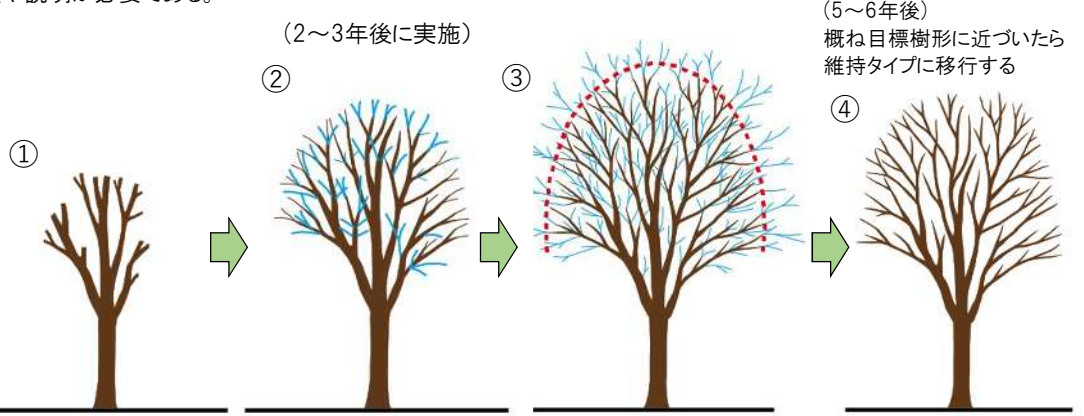


切詰め剪定を繰り返した結果、頂部が「こぶ状」になっている場合、「こぶ」を切除して、頂部をおわんを伏せたような形に柔らかく作り直す。

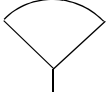
■樹種別剪定標準計画

樹種	ケヤキ
維持タイプ	<p>・剪定時は切詰めせず、枝抜きや切返しを原則とする。 ・コンパクトな樹形を保つには、若い時期から毎年こまめに切返し剪定を行う。</p> <p>①～② ・切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな盃形樹形を作る。 ・頂部優勢を意識して、上方の枝の密度を薄くする。 ・下方枝の切り過ぎに注意して剪定する。 ・枝の伸びしろを考慮して、現状より樹高と枝張をそれぞれ目標樹形よりも小さくなるように剪定する。</p> <p>③～④ ・頂部優勢のコントロールと不要枝を除去する剪定を繰り返す。 ・切返し剪定を主体とすると大きな切り口ができないため、翌年以降も新生枝が著しく発生することは少ない。</p>
縮小タイプ	<p>・副主枝の切詰め剪定によって縮小した後に萌芽してくる枝を数年にかけてコンパクトに整え直す。 ・対象樹木が目標樹形よりもやや大きい場合はその全体を、並木の一部分が突出して大きいものは、平均高に合わせ、やや強度の剪定によって樹形を縮小する。</p> <p>①～② ・頂部優勢のコントロールを意識し、下方枝の切り過ぎに注意して下方ほど多く枝を残す様に剪定する。 ・残した枝が樹冠線より突出している場合は、側枝を外芽の直上で斜め切りする。 ・定芽のない枝の剪定は、ブツ切りにせず切断面を斜めにカットする。 ・ふところ枝がある場合は、ふところ枝の直上で斜め切りする。 ・やや強い剪定をする場合は、副主枝を切詰め剪定し盃形に調整する。</p> <p>③～④ ・副主枝を切詰め剪定した枝に複数の新生枝が出ているので、2～3本残して剪定して側枝を育てる。 ・ふところ枝を残して剪定した枝は、新生枝を3～5本残し側枝を育てる。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>

■樹種別剪定標準計画

樹種	ケヤキ
<p>育成 拡大 タイプ</p>	<p>・樹形全体を大きくすることを目指し、将来の骨格を定め、枝のバランス等を考慮しながら育成する。 ・建築限界内の支障枝や込み入った枝等の除去は枝抜き剪定を基本とし、切詰め剪定は最小限にとどめる。 ・立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめる。</p> <p style="text-align: right;">概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・育成を目的として基本的に枝の縮小は行わず、枝抜きによって不要枝を除去し、枝の密度を調整する（切返し剪定、枝おろし剪定）。 ・自然樹形に相似した樹形(盃形)に整える。</p> <p>②～③ ・頂部優勢を意識しながら切返し剪定により枝の密度をコントロールする。 ・基本的に不要枝を除去する軽微な剪定を行い、切り過ぎに注意する。 目標樹形に達するまでは、この剪定を繰り返す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら、維持タイプに移行して、切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな盃形樹形をつくる。</p>
<p>【参考】 樹形再生 タイプ</p>	<p>・ケヤキの枝は、互生状に分枝し、さらに互生状に細枝に分かれて盃状に広がるので、思い切って樹冠を縮小する場合、将来の成長と周囲の空間とのバランスを考えて切詰める。 ・幹曲がりや片枝など微小剪定で対応できない樹形の悪い樹木は、主枝や幹の梢部を含めて切詰め剪定によって骨格を作り直す。 ・目標樹形を目指した切詰め剪定により枝数の少ない極端な樹形となるため、実施に際しては関係各所との丁寧な調整や説明が必要である。</p> <p style="text-align: center;">(2～3年後に実施)</p>  <p style="text-align: right;">(5～6年後) 概ね目標樹形に近づいたら維持タイプに移行する</p> <p>① ・主枝を切詰め剪定し、骨格となる枝の長さを調整する。 ・盃形となるように、また、下方ほど枝数を多く残すことに留意する。 ・切り口はななめ切りにし、防菌及び癒合促進処理を施す。</p> <p>②～③ ・外側に向かって素直に伸びた枝を数本残して、不要枝といわれる立枝やからみ枝などを切除する。 ・主枝の途中で切詰めた枝は、切り口から多くの枝が萌芽するので、外側に向かって素直に伸びた枝を2～3本残して切除、残した枝を整理して副主枝に育てる。 ・切り口から萌芽していない場合は、枝の出ている部位まで切詰める。 ・主枝の切詰め剪定は、元の太い枝と新しい枝の太さが顕著になるが、時間をかければ自然に近い状態に戻すことができる。 ・切詰めた枝が自然な姿に戻るまでには5～6年が必要。</p> <p>③～④ ・目標樹形に近づいてきたら切詰め剪定は行わず、枝抜き剪定・切返し剪定を行い盃型の樹形に整える。 →維持タイプに移行する。</p>

■樹種別剪定標準計画

樹種	サトザクラ		
管理方向性	・盃形の樹形となるよう、主枝、副枝、側枝から成るバランスの取れた枝構成を目指す。 ・剪定した切り口から腐朽菌が入りやすいため、太い枝の剪定や強い剪定はできるだけ避け、太い枝の切り口には必ず防菌及び癒合促進処理を施す。		
剪定時期	冬期：12月～2月頃	目標樹形：盃形 枝張り/樹高比：0.7～	 樹形イメージ
目標樹形の設定	・目標樹形は「第2章 1. 管理目標樹形の設定」(P.7～)を参考に設定する。 ・剪定樹形は樹木の伸長量をもとに決定する。		

* 青色の枝：不要・剪定対象枝を示す

上方枝
外芽を残して定芽の真上で切詰める。形成する樹形の樹冠線を想像して切り過ぎない。

ふところ枝
副主枝として伸ばし、枝が必要な場所に育成する。立枝は切除する。

下方枝
少なくなりがちであるため意識的に残すようにする。

こぶや胸ぶきから出た枝
不定芽の発生防止、樹木の健全育成を図るため、カルスの形成を促す適切な位置で切除する。

頂部
将来、芯となる主枝を伸ばすため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。

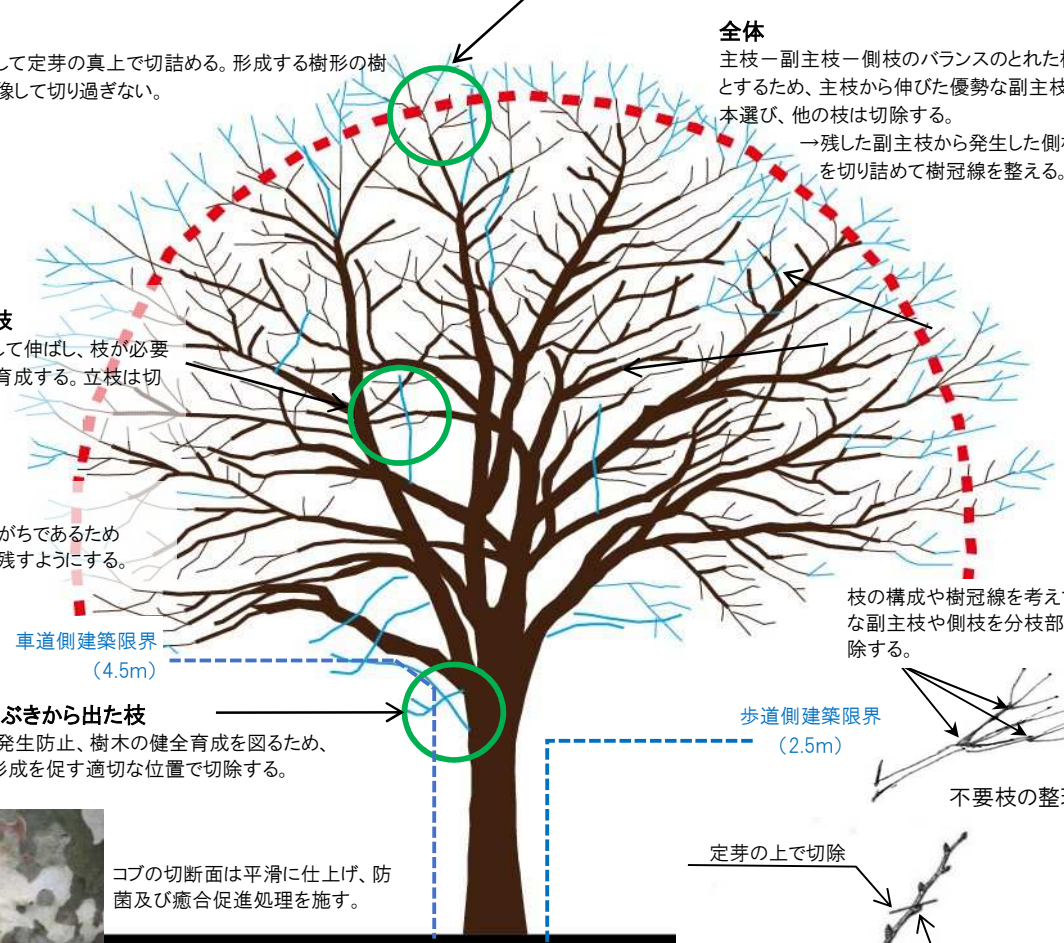
全体
主枝—副主枝—側枝のバランスのとれた構成とするため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。
→残した副主枝から発生した側枝を切り詰めて樹冠線を整える。

不要枝の整理

枝の構成や樹冠線を考えて不要な副主枝や側枝を分枝部で切除する。

側枝の切除位置

外芽を残す
外芽を残し、定芽の真上で切詰める




車道側建築限界 (4.5m)

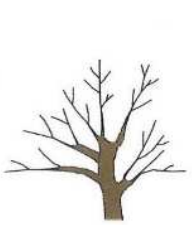
歩道側建築限界 (2.5m)

安全の確保・樹木の健全育成のため、枯枝、からみ枝、逆枝、建築限界を越境している枝などの支障枝は適切に切除する。

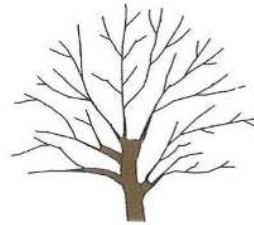
* 頂部の仕立て方



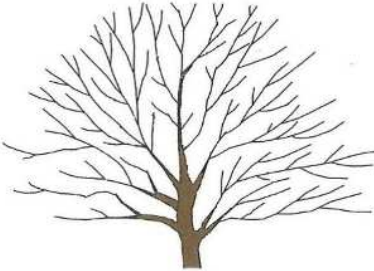
剪定前
(初年度剪定位置)



初年度剪定



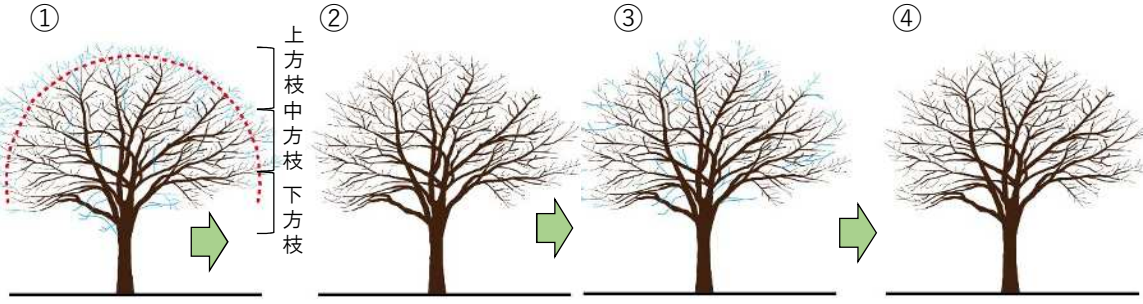
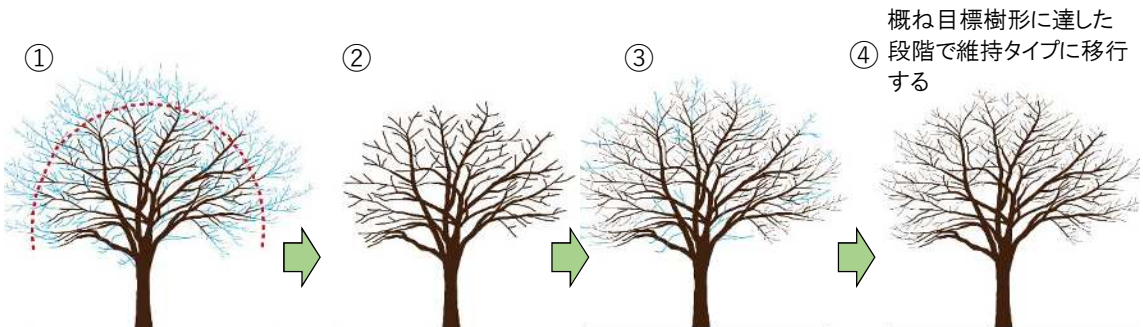
2年目剪定後



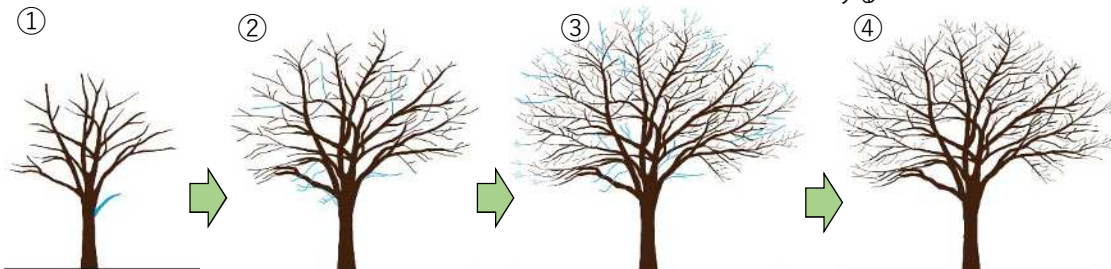
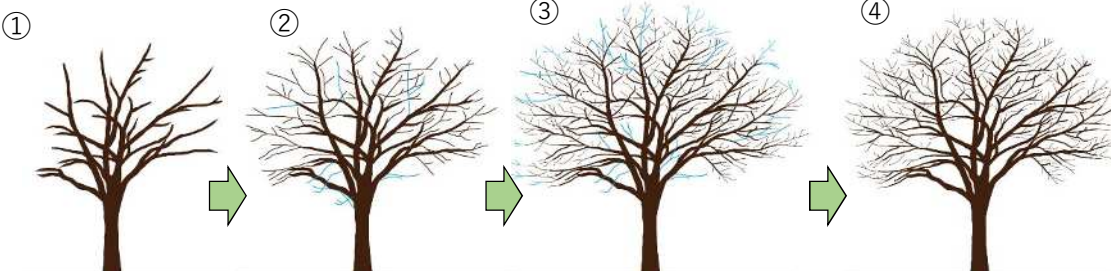
樹冠の仕上がりがイメージ

切詰め剪定を繰り返した結果、頂部が「こぶ状」になっている場合、「こぶ」を切除して、頂部をおわんを伏せたような形に柔らかく作り直す。


■樹種別剪定標準計画

樹種	サトザクラ
維持タイプ	<p>・剪定した切り口から腐朽菌が入りやすいため、細い枝や虚弱枝、ふところ枝の除去程度にとどめ、やむを得ず枝抜きをする場合は、切り口に防菌及び癒合促進処理を施す。</p> <p>・病虫害が多いため、テング巣病やアメリカシロヒトリ等を発見次第、直ちに対応を図る。</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな盃形樹形を作る。 ・頂部優勢を意識して、上方の枝の密度を薄くする。 ・下方枝の切り過ぎに注意して剪定する。 ・枝の伸びしろを考慮して、現状より樹高と枝張をそれぞれ目標樹形よりも小さくなるように剪定する。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・樹形が整えば冬期剪定は1年置き程度でよい。 ・頂部優勢のコントロールと不要枝を除去する剪定を繰り返す。 ・切返し剪定を主体とすれば大きな切り口ができないため、翌年以降も新生枝が著しく発生することは少ない。
縮小タイプ	<p>・対象樹木が目標樹形よりも大きい場合、副主枝の切詰め剪定によって樹形を縮小し、後に萌芽してくる枝を数年かけてコンパクトに整え直していく。</p> <p>・剪定した切り口から腐朽菌が入りやすいため、切り口に防菌及び癒合促進処理を施す。</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頂部優勢のコントロールを意識し、下方枝の切り過ぎに注意、下方ほど多く枝を残す様に剪定する。 ・残した枝が樹冠線より突出している場合は、側枝を外芽の直上で斜め切りする。 ・やや強い剪定をする場合は、副主枝を切詰め剪定し盃形に調整する。 ・定芽ない枝はブツ切りにせず切断面を斜め切り、ふところ枝がある場合は、ふところ枝の直上で斜め切りする。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・副主枝を切詰め剪定した枝に複数の新生枝が出ているので、2～3本残して剪定して側枝を育てる。 ・ふところ枝を残して剪定した枝は、新生枝を3～5本残し側枝を育てる。 <p>④ 概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>

■樹種別剪定標準計画

樹種	サトザクラ
<p>育成 拡大 タイプ</p>	<p>・樹形全体を大きくすることを目指し、将来の骨格を定め、枝のバランス等を考慮しながら育成する。 ・建築限界内の支障枝や込み入った枝等の除去は枝抜き剪定を基本とし、切詰め剪定は最小限にとどめる。 ・立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめる。 ・剪定した切り口から腐朽菌が入りやすいため、将来支障となりそうな枝は、できるだけ細いうちに切除する。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・育成を目的として基本的に枝の縮小は行わず、枝抜きによって不要枝を除去し、枝の密度を調整する (切返し剪定、枝おろし剪定)。 ・自然樹形に相似した樹形(盃形)に整える。</p> <p>②～③ ・頂部優勢を意識しながら切返し剪定により枝の密度をコントロールする。 ・不要枝を除去する軽微な剪定を基本とし、切り過ぎに注意する。 ・目標樹形に達するまでは、この剪定を繰り返し行う。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら、維持タイプに移行し、切返し剪定を主体に側枝を整理して柔らかな盃形樹形をつくる。</p>
<p>【参考】 樹形再生 タイプ</p>	<p>・幹曲がりや片枝など微小剪定で対応できない樹形の悪い樹木は、主枝や幹の梢部を含めて切詰め剪定を行い、骨格を作り直す。 ・目標樹形を目指した切詰め剪定により枝数の少ない極端な樹形となるため、実施に際しては関係各所との丁寧な調整や説明が必要である。 ・剪定した切り口から腐朽菌が入りやすいため、やむを得ず枝抜きをする場合は、切り口に防菌及び癒合促進処理を施す。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p> <p>(1～2年後に実施)</p>  <p>① ・大枝の剪定は、剪定箇所が裂けないよう二段切りとする。 ・主枝を切詰め剪定し、骨格となる枝の長さを調整する。 ・盃形となるように、また、下方ほど枝数を多く残すよう留意する。</p> <p>②～③ ・外側に向かって素直に伸びた枝を数本残して、不要枝といわれる立枝やからみ枝などを切除する。 ・切り口から萌芽していない場合は、萌芽している部位まで切戻す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら維持タイプに移行し、不要枝の枝抜きと切返し剪定によって樹形を維持する。</p>

■樹種別剪定標準計画

樹種	スズカケノキ		 樹形イメージ
管理方向性	・萌芽力が旺盛なため、年2回(夏期・冬期)剪定を行う。 ・枝抜きと切返し剪定を行い、バランスの良い枝構成を目指す。 ・夏期剪定は緑陰形成と樹冠線を整えることを目的とし、空が少し透けて見える程度に込み入った枝を透かす。		
剪定時期	夏期: 7月～8月頃(酷暑、台風前) 冬期: 12月～2月頃	目標樹形: 卵円形 枝張り/樹高比: 0.5～	
目標樹形の設定	・目標樹形は「第2章 1. 管理目標樹形の設定」(P.7～)を参考に設定する。 ・剪定樹形は樹木の伸長量をもとに決定する。		

* 青色の枝: 不要・剪定対象枝を示す

側枝

副主枝から発生した側枝は、切詰めて樹冠線を整える。

樹冠幅

樹木の間中枝を基本とする。

全体(夏)

樹冠線を整えることを第一とし、空が少し透けて見える程度に込み入った枝を透かす。

ふところ枝

副主枝として伸ばし、枝が必要な場所に育成する。立枝は切除する。

車道側建築限界
(4.5m)

こぶや胴ぶきから出た枝

不定芽の発生防止。
樹木の健全育成を図るため、カサの形成を促す適切な位置で切除する。



コブの切断面は平滑に仕上げ、防菌及び癒合促進処理を施す。

頂部

将来、芯となる主枝を伸ばすため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。

全体(冬)

主枝-副主枝-側枝のバランスのとれた構成とするため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。
→残した副主枝から発生した側枝



枝の構成や樹冠線を考えて不要な副主枝や側枝を分枝部で切除する。

不要枝の整理

定芽の上で切除

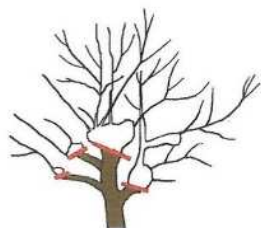
外芽は残す

側枝の切除位置

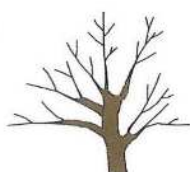
外芽を残し、定芽の真上で切詰める。

下方枝は少なくなりがちであるため意識的に残し、上方枝は形成する樹形の樹冠線を想像して切り過ぎないようにする。
安全の確保・樹木の健全育成のため、枯枝、からみ枝、逆枝、建築限界を越境している枝などの支障枝は適切に切除する。

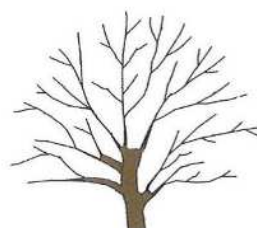
* 頂部の仕立て方



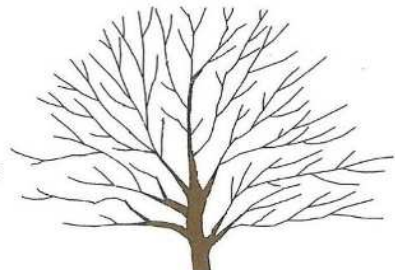
剪定前
(初年度剪定位置)



初年度剪定



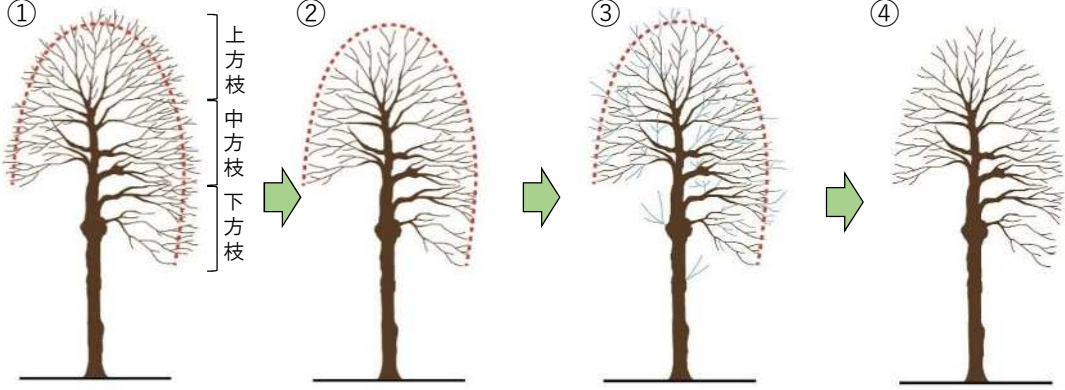
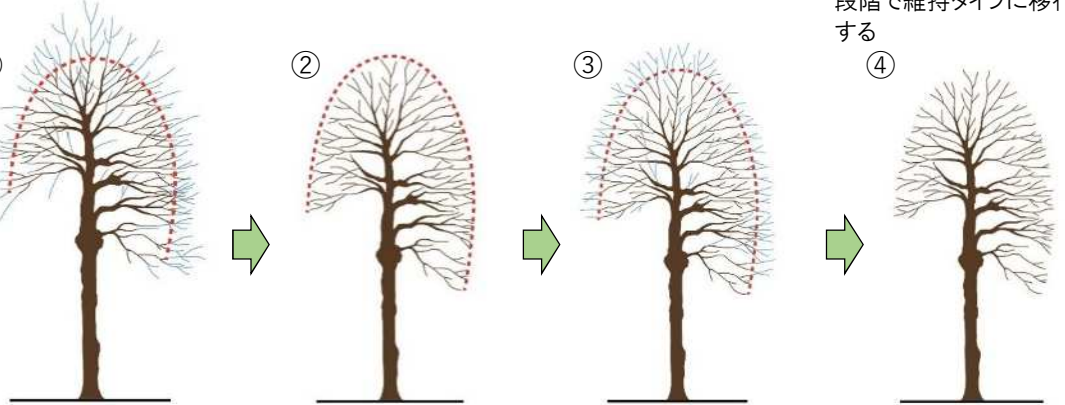
2年目剪定後



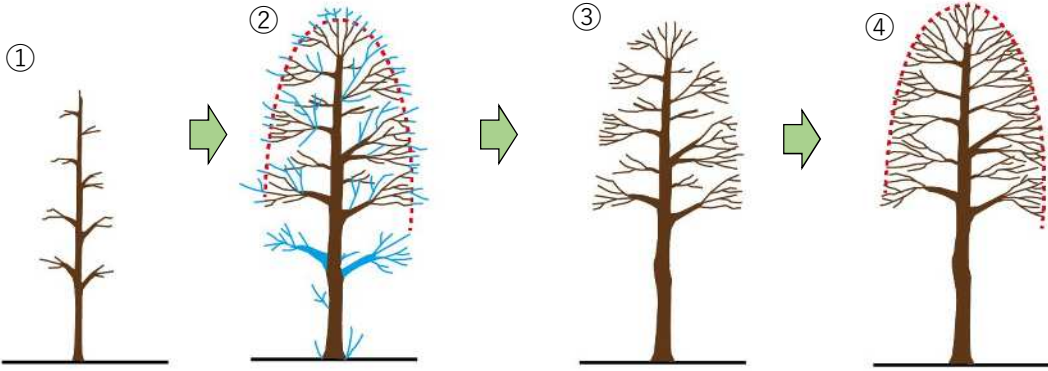
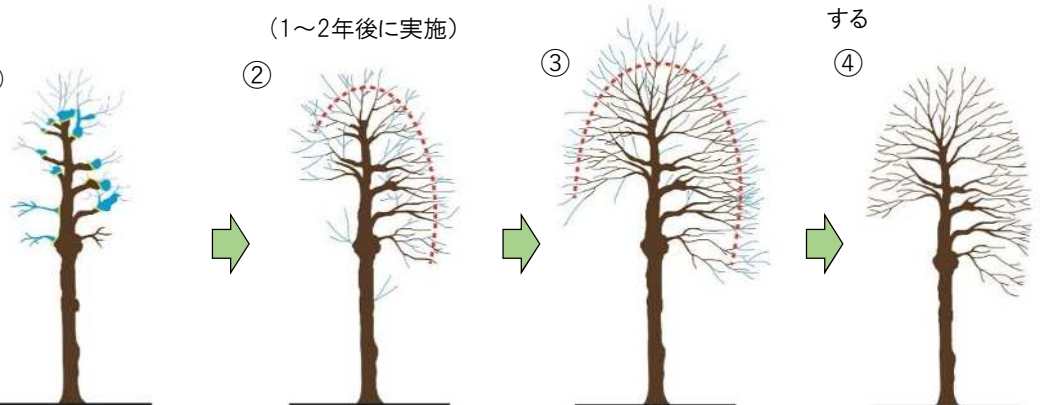
樹冠の仕上がりイメージ

卵円形樹形に仕立てるのが一般的だが、切詰め剪定を繰り返した結果、頂部が「こぶ状」になっている場合、「こぶ」を切除して、頂部をおわんを伏せたような形に柔らかく作り直す。

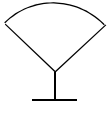
■樹種別剪定標準計画

樹種	スズカケノキ
維持タイプ	<p>・枝透かしと切返しによる冬期剪定を毎年行い、根の伸長できる植栽帯の幅員や植栽柵の大きさを踏まえ、成長に支障の無い樹高、樹冠で維持する。</p>  <p>①～② ・切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな卵円形樹形を作る。 ・頂部優勢を意識して、上方の枝の密度を薄くする。 ・下方枝の切り過ぎに注意して剪定する。 ・枝の伸びしろを考慮して、現状より樹高と枝張がそれぞれ目標樹形よりも小さくなるように剪定する。</p> <p>③～④ ・頂部優勢のコントロールと不要枝を除去する剪定を繰り返す。 ・切返し剪定を主体とすれば大きな切り口ができないため、翌年以降も新生枝が著しく発生することは少ない。</p>
縮小タイプ	<p>・対象樹木が目標樹形よりも大きい場合、副主枝の切詰め剪定によって樹形を縮小し、後に萌芽してくる枝を数年かけてコンパクトに整え直していく。</p>  <p>①～② ・頂部優勢のコントロールを意識し、下方枝の切り過ぎに注意して下方ほど多く枝を残す様に剪定する。 ・残した枝が樹冠線より突出している場合は、側枝を外芽の直上で斜め切りする。 ・やや強い剪定をする場合は、副主枝を切詰め剪定し卵円形に調整する。</p> <p>③～④ ・副主枝を切詰め剪定した枝に複数の新生枝が出ているので、2～3本残して剪定して側枝を育てる。 ・ふところ枝を残して剪定した枝は、新生枝を3～5本残し側枝を育てる。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>

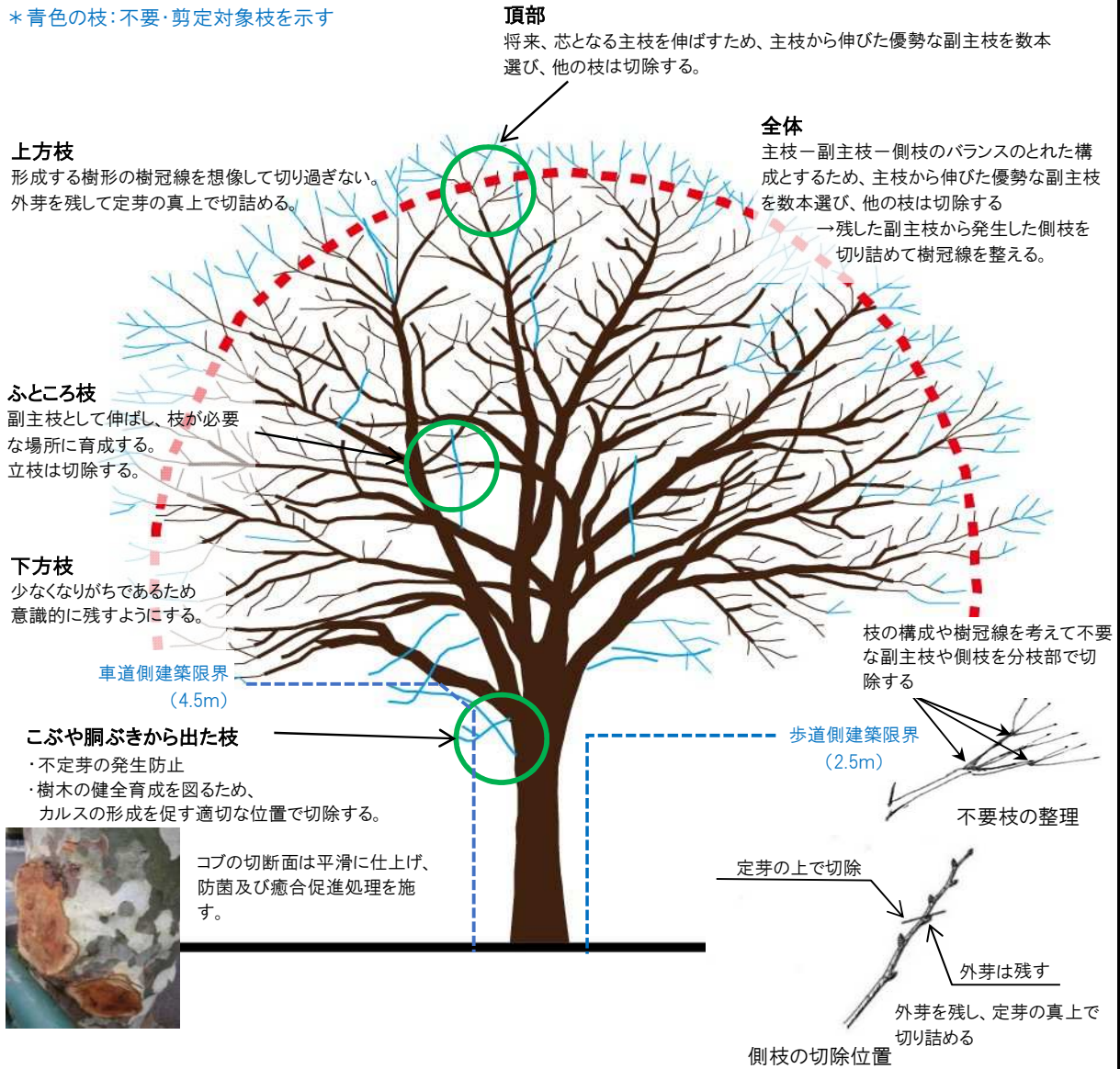
■樹種別剪定標準計画

樹種	スズカケノキ
<p>拡大タイプ</p>	<p>・樹形全体を大きくすることを目指し、将来の骨格を定め、枝のバランス等を考慮しながら育成する。 ・建築限界内の支障枝や込み入った枝等の除去は枝抜き剪定を基本とし、切詰め剪定は最小限にとどめる。 ・立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめる。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・育成を目的として基本的に枝の縮小は行わず、枝抜きによって不要枝を除去し、枝の密度を調整する。 (切返し剪定、枝おろし剪定) ・自然樹形に相似した樹形(卵円形)に整える。</p> <p>②～③ ・頂部優勢を意識しながら切返し剪定により枝の密度をコントロールする。 ・不要枝を除去する軽微な剪定を基本とし、切り過ぎに注意する。 目標樹形に達するまでは、この剪定を繰り返す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら、維持タイプに移行し、切返し剪定を主体に側枝を整理して柔らかな卵円形樹形をつくる。</p>
<p>【参考】再生タイプ</p>	<p>・幹曲がりや片枝など微小剪定で対応できない樹形の悪い樹木は、主枝や幹の梢部を含めて切詰め剪定を行い骨格を作り直す。 ・目標樹形を目指した切詰め剪定により枝数の少ない極端な樹形となるため、実施に際しては関係各所との丁寧な調整や説明が必要である。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>(1～2年後に実施)</p> <p>① ・主枝を切詰め剪定し、骨格となる枝の長さを調整する。 ・卵円形となるように、また、下方ほど枝数を多く残すよう留意する。</p> <p>②～③ ・外側に向かって素直に伸びた枝を数本残して、不要枝といわれる立枝やからみ枝などを切除する。 ・切り口から萌芽していない場合は、萌芽している部位まで切戻す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら維持タイプに移行し、不要枝の枝抜きと切返し剪定によって樹形を維持する。</p>

■樹種別剪定標準計画

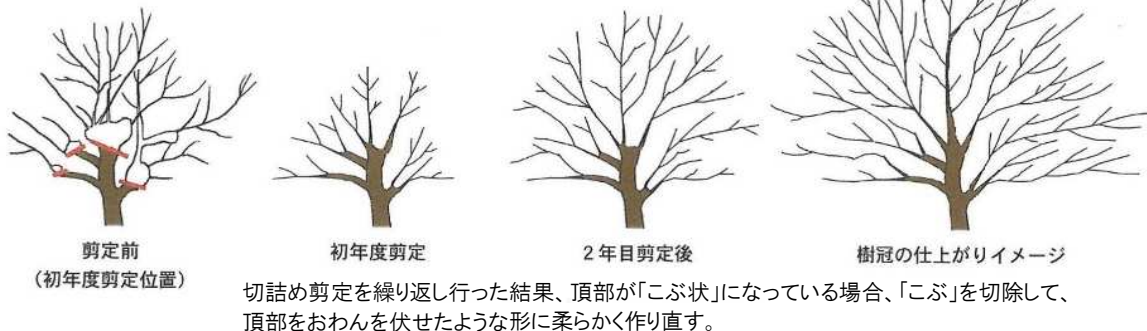
樹種	ソメイヨシノ		
管理方向性	<ul style="list-style-type: none"> ・盃形の樹形となるよう、主枝、副枝、側枝から成るバランスの取れた枝構成を目指す。 ・剪定した切り口から腐朽菌が入りやすいため、太い枝の剪定や強い剪定はできるだけ避け、太い枝の切り口には必ず防腐処理を行う。 		
剪定時期	冬期：12月～2月頃	目標樹形：盃形 枝張り/樹高比：1.0～	 樹形イメージ
目標樹形の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・目標樹形は「第2章 1. 管理目標樹形の設定」(P.7～)を参考に設定する。 ・剪定樹形は樹木の伸長量をもとに決定する。 		

*青色の枝：不要・剪定対象枝を示す

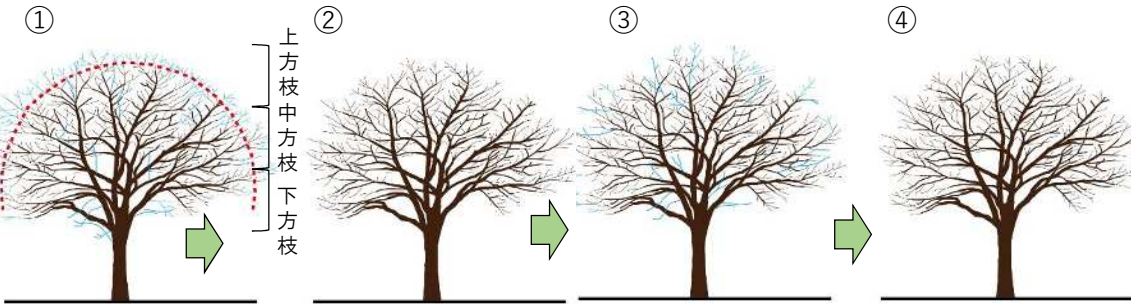
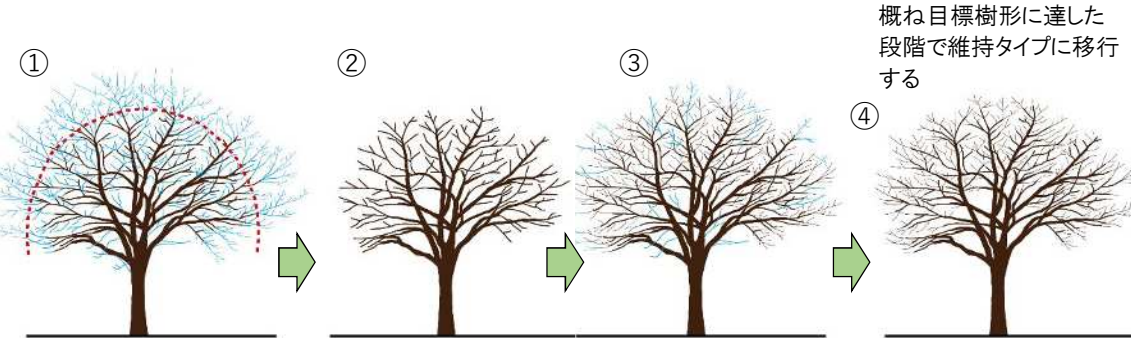


安全の確保・樹木の健全育成のため、枯枝、からみ枝、逆枝、建築限界を越境している枝などの支障枝は適切に切除する。

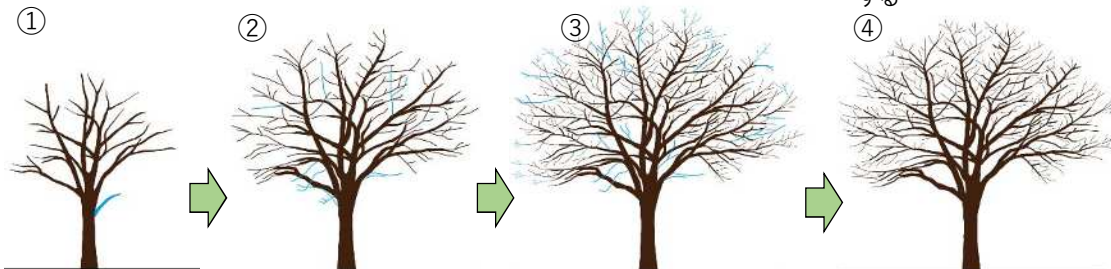
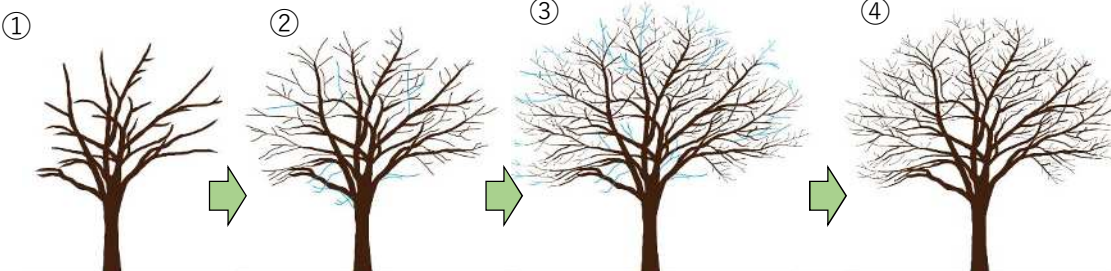
* 頂部の仕立て方



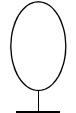
■樹種別剪定標準計画

樹種	ソメイヨシノ
維持タイプ	<p>・剪定した切り口から腐朽菌が入りやすいため、細い枝や虚弱枝、ふところ枝の除去程度にとどめ、やむを得ず枝抜きをする場合は、必ず切り口に防菌及び癒合促進処理を施す。</p> <p>・病虫害が多いため、テング巢病やアメリカシロヒトリ等を発見次第、直ちに対応を図る。</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな盃形樹形を作る。 ・頂部優勢を意識して、上方の枝の密度を薄くする。 ・下方枝の切り過ぎに注意して剪定する。 ・枝の伸びしろを考慮して、現状より樹高と枝張をそれぞれ目標樹形よりも小さくなるように剪定する。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・樹形が整えば冬期剪定は1年置き程度でよい。 ・頂部優勢のコントロールと不要枝を除去する剪定を繰り返す。 ・切返し剪定を主体とすれば大きな切り口ができないため、翌年以降も新生枝が著しく発生することは少ない。
縮小タイプ	<p>・対象樹木が目標樹形よりも大きい場合、副主枝の切詰め剪定によって樹形を縮小し、後に萌芽してくる枝を数年かけてコンパクトに整え直していく。</p> <p>・剪定した切り口から腐朽菌が入りやすいため、必ず切り口に防菌及び癒合促進処理を施す。</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頂部優勢のコントロールを意識し、下方枝の切り過ぎに注意、下方ほど多く枝を残す様に剪定する。 ・残した枝が樹冠線より突出している場合は、側枝を外芽の直上で斜め切りする。 ・やや強い剪定をする場合は、副主枝を切詰め剪定し盃形に調整する。 ・定芽のない枝はブツ切りにせず切断面を斜め切り、ふところ枝がある場合は、ふところ枝の直上で斜め切りする。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・副主枝を切詰め剪定した枝に複数の新生枝が出ているので、2～3本残して剪定して側枝を育てる。 ・ふところ枝を残して剪定した枝は、新生枝を3～5本残し側枝を育てる。 <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>

■樹種別剪定標準計画

樹種	ソメイヨシノ
<p>育成 拡大 タイプ</p>	<p>・樹形全体を大きくすることを目指し、将来の骨格を定め、枝のバランス等を考慮しながら育成する。 ・建築限界内の支障枝や込み入った枝等の除去は枝抜き剪定を基本とし、切詰め剪定は最小限にとどめる。 ・立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめる。 ・剪定した切り口から腐朽菌が入りやすいため、将来支障となりそうな枝はできるだけ細いうちに切除する。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・育成を目的として基本的に枝の縮小は行わず、枝抜きによって不要枝を除去し、枝の密度を調整する（切返し剪定、枝おろし剪定）。 ・自然樹形に相似した樹形(盃形)に整える。</p> <p>②～③ ・頂部優勢を意識しながら切返し剪定により枝の密度をコントロールする。 ・不要枝を除去する軽微な剪定を基本とし、切り過ぎに注意する。 ・目標樹形に達するまでは、この剪定を繰り返し行う。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら、維持タイプに移行し、切返し剪定を主体に側枝を整理して柔らかな盃形樹形をつくる。</p>
<p>【参考】 樹形再生 タイプ</p>	<p>・幹曲がりや片枝など微小剪定で対応できない樹形の悪い樹木は、主枝や幹の梢部を含めて切詰め剪定を行い、骨格を作り直す。 ・目標樹形を目指した切詰め剪定により枝数の少ない極端な樹形となるため、実施に際しては関係各所との丁寧な調整や説明が必要である。 ・剪定した切り口から腐朽菌が入りやすいため、やむを得ず枝抜きをする場合は、必ず切り口に防菌及び癒合促進処理を施す。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p> <p>(1～2年後に実施)</p>  <p>① ・大枝の剪定は、剪定箇所が裂けないよう二段切りとする。 ・主枝を切詰め剪定し、骨格となる枝の長さを調整する。 ・盃形となるように、また、下方ほど枝数を多く残すよう留意する。</p> <p>②～③ ・外側に向かって素直に伸びた枝を数本残して、不要枝といわれる立枝やからみ枝などを切除する。 ・切り口から萌芽していない場合は、萌芽している部位まで切戻す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら維持タイプに移行し、不要枝の枝抜きと切返し剪定によって樹形を維持する。</p>

■樹種別剪定標準計画

樹種	タイワンフウ		
管理方向性	・剪定しても新たな枝が出にくく、むやみに剪定を行うと樹形が崩れやすいので、不要枝を間引く程度の剪定にとどめる。 ・概ね卵円形の樹形となるよう、主枝、副枝、側枝から成るバランスの取れた枝構成を目指す。		
剪定時期	冬期：12月～2月頃	目標樹形：卵円形 枝張り/樹高比：0.5～	 樹形イメージ
目標樹形の設定	・目標樹形は「第2章 1. 管理目標樹形の設定」(P.7～)を参考に設定する。 ・剪定樹形は樹木の伸長量をもとに決定する。		

*青色の枝：不要・剪定対象枝を示す

上方枝

外芽を残して定芽の真上で切詰める。形成する樹形の樹冠線を想像して切り過ぎない。

側枝

副主枝から発生した側枝は切り詰めて樹冠線を整える。

樹冠幅

樹木の間中枝を基本とする。

ふところ枝

副主枝として伸ばし、枝が必要な場所に育成する。立枝は切除する。

車道側建築限界
(4.5m)

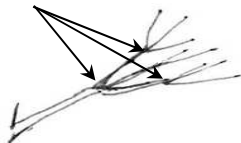
こぶや胴ぶきから出た枝

・不定芽の発生防止。
 ・樹木の健全育成を図るため、カルスの形成を促す適切な位置で切除する。

コブの切断面は平滑に仕上げ、防菌及び癒合促進処理を施す。



枝の構成や樹冠線を考えて不要な副主枝や側枝を分枝部で切除する。



不要枝の整理

頂部

将来、芯となる主枝を伸ばすため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。

全体

主枝—副主枝—側枝のバランスのとれた構成とするため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。
 →残した副主枝から発生した側枝を切り詰めて樹冠線を整える。

下方枝

少なくなりがちであるため意識的に残すようにする。

歩道側建築限界
(2.5m)

定芽の上で切除

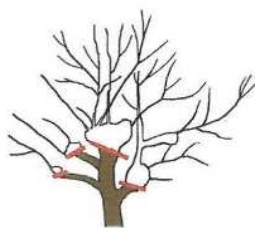
外芽は残す

側枝の切除位置

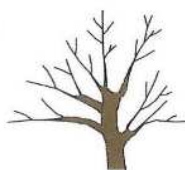
外芽を残し、定芽の真上で切詰める

安全の確保・樹木の健全育成のため、枯枝、からみ枝、逆枝、建築限界を越境している枝などの支障枝は適切に切除する。

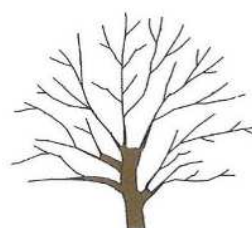
* 頂部の仕立て方



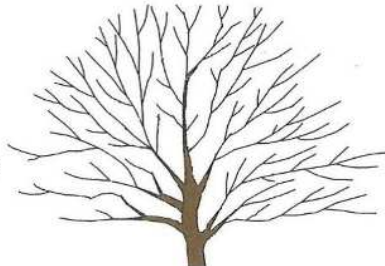
剪定前
(初年度剪定位置)



初年度剪定



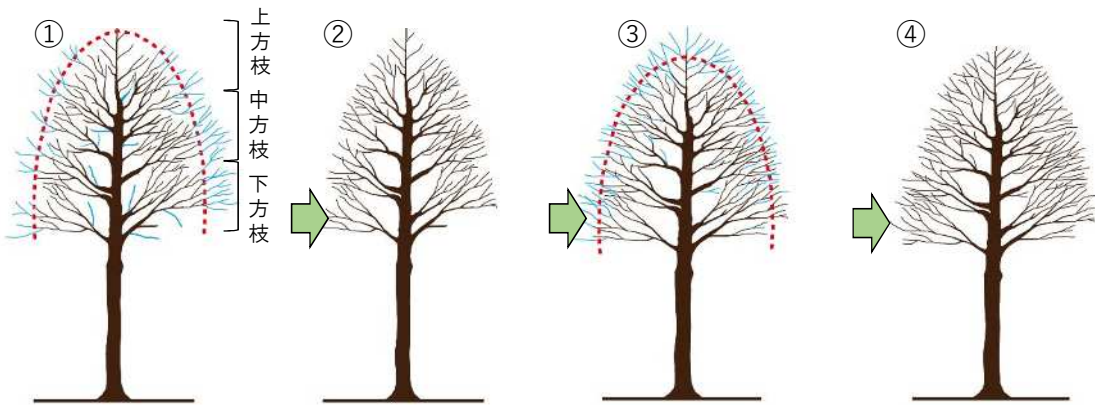
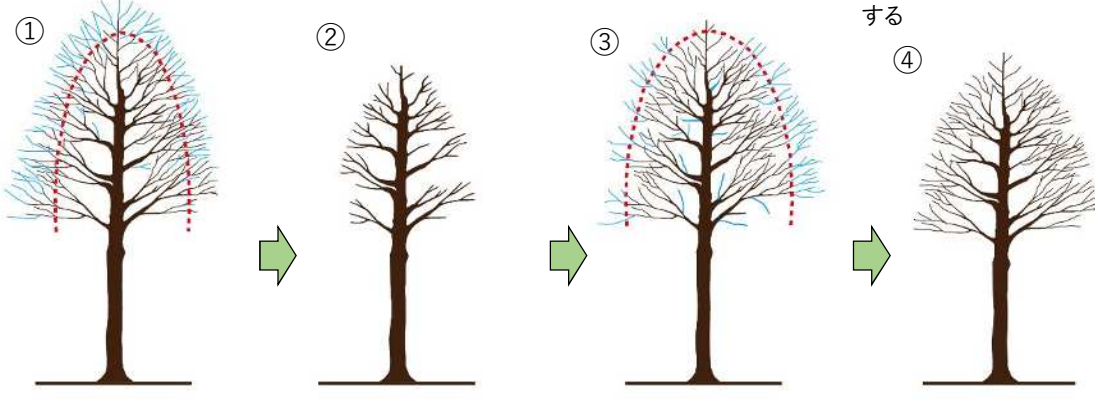
2年目剪定後



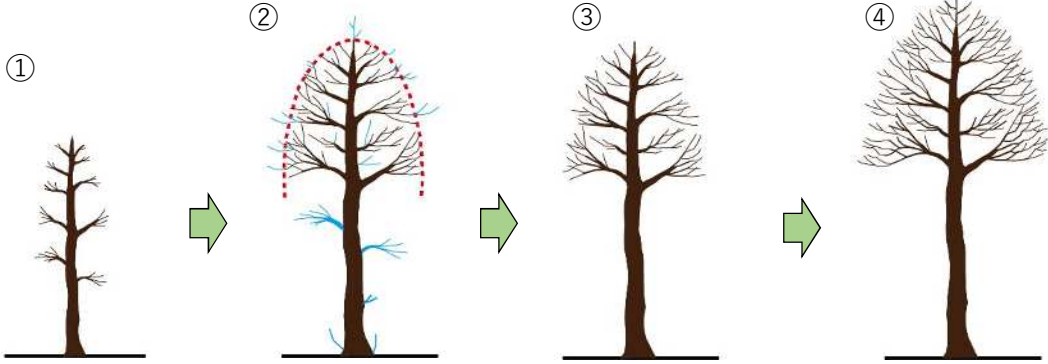
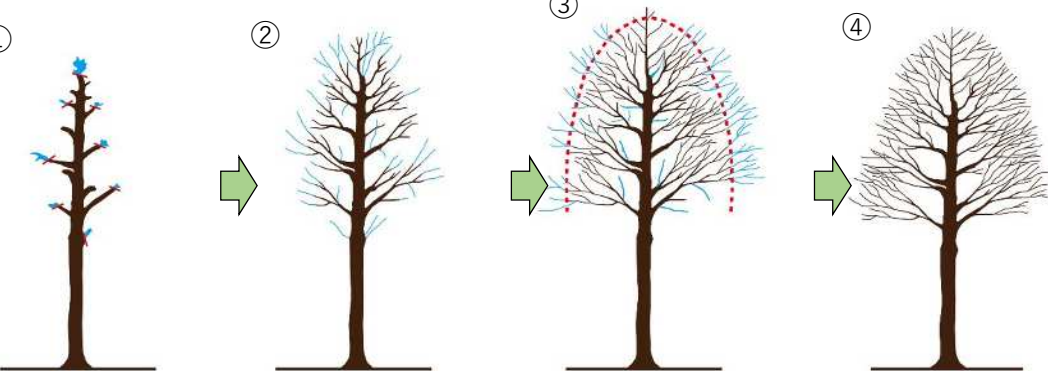
樹冠の仕上がりのイメージ

切詰め剪定を繰り返し行った結果、頂部が「こぶ状」になっている場合、「こぶ」を切除して、頂部をおわんを伏せたような形に柔らかく作り直す。

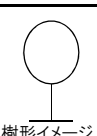
■樹種別剪定標準計画

樹種	台湾フウ
維持タイプ	<p>・剪定しても新たな枝が出にくいので、不要枝の除去や切返し剪定により側枝を整理して、柔らかな卵円形樹形をつくる。</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな卵円形樹形を作る。 ・頂部優勢を意識して、上方の枝の密度を薄くする。 ・下方枝の切り過ぎに注意して剪定する。 ・枝の伸びしろを考慮して、樹高と枝張がそれぞれ目標樹形よりも小さくなるように剪定する。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・樹形が整えば冬期剪定は1年置き程度でよい。 ・頂部優勢のコントロールと不要枝を除去する剪定を繰り返す。 ・切返し剪定を主体とすれば大きな切り口ができないため、翌年以降も新生枝が著しく発生することは少ない。
縮小タイプ	<p>・対象樹木が目標樹形よりも大きい場合、副主枝の切詰め剪定によって樹形を縮小し、後に萌芽してくる枝を数年かけてコンパクトに整え直していく。</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頂部優勢のコントロールを意識し、下方枝の切り過ぎに注意、下方ほど多く枝を残す様に剪定する。 ・残した枝が樹冠線より突出している場合は、側枝を外芽の直上で斜め切りする。 ・やや強い剪定をする場合は、副主枝を切詰め剪定し卵円形に調整する。 ・定芽のない枝はブツ切りにせず切断面を斜め切り、ふところ枝がある場合は、ふところ枝の直上で斜め切りする。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・副主枝を切詰め剪定した枝に複数の新生枝が出ているので、2～3本残して剪定して側枝を育てる。 ・ふところ枝を残して剪定した枝は、新生枝を3～5本残し側枝を育てる。 <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>

■樹種別剪定標準計画

樹種	台湾フウ
<p>育成拡大タイプ</p>	<p>・樹形全体を大きくすることを目指し、将来の骨格を定め、枝のバランス等を考慮しながら育成する。 ・建築限界内の支障枝や込み入った枝等の除去は枝抜き剪定を基本とし、切詰め剪定は最小限にとどめる。 ・立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめる。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・育成を目的として基本的に枝の縮小は行わず、枝抜きによって不要枝を除去し、枝の密度を調整する。 (切返し剪定、枝おろし剪定) ・自然樹形に相似した樹形(卵円形)に整える。</p> <p>②～③ ・頂部優勢を意識しながら切返し剪定により枝の密度をコントロールする。 ・不要枝を除去する軽微な剪定を基本とし、切り過ぎに注意する。 ・目標樹形に達するまでは、この剪定を繰り返す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら、維持タイプに移行し、切返し剪定を主体に側枝を整理して柔らかな卵円形樹形をつくる。</p>
<p>【参考】樹形再生タイプ</p>	<p>・幹曲がりや片枝など微小剪定で対応できない樹形の悪い樹木は、主枝や幹の梢部を含めて切詰め剪定によって骨格を作り直す。 ・目標樹形を目指した切詰め剪定により枝数の少ない極端な樹形となるため、実施に際しては関係各所との丁寧な調整や説明が必要である。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p> <p>(1～2年後に実施)</p>  <p>① ・大枝の剪定は、剪定箇所が裂けないよう二段切りとする。 ・主枝を切詰め剪定し、骨格となる枝の長さを調整する。 ・卵円形となるように、また、下方ほど枝数を多く残すことに留意する。</p> <p>②～③ ・外側に向かって素直に伸びた枝を数本残して、不要枝といわれる立枝やからみ枝などを切除する。 ・切り口から萌芽していない場合は、萌芽している部位まで切戻す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら維持タイプに移行し、不要枝の枝抜きと切返し剪定によって樹形を維持する。</p>

■樹種別剪定標準計画

樹種	トウカエデ		
管理方向性	・概ね卵円形の樹形となるよう、枝抜きと切返し剪定により、主枝、副枝、側枝から成るバランスの取れた枝構成を目指す。		
剪定時期	冬期：12月～2月頃	目標樹形：卵円形 枝張り/樹高比：0.5～	 樹形イメージ
目標樹形の設定	・目標樹形は「第2章 1. 管理目標樹形の設定」(P.7～)を参考に設定する。 ・剪定樹形は樹木の伸長量をもとに決定する。		

* 青色の枝：不要・剪定対象枝を示す

上方枝

外芽を残して定芽の真上で切詰める。
形成する樹形の樹冠線を想像して切り過ぎない。

側枝

副主枝から発生した側枝は切詰めて樹冠線を整える。

樹冠幅

樹木の間中枝を基本とする。

ふところ枝

主枝が少ない場合、ふところ枝を活かして副主枝として伸ばし、枝が必要な場所に育成する。
立枝は切除する。

頂部

将来、芯となる主枝を伸ばすため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。

全体

主枝一副主枝一側枝のバランスのとれた構成とするため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。

→残した副主枝から発生した側枝を切り詰めて樹冠線を整える。

下方枝

少なくなりがちであるため意識的に残すようにする。

車道側建築限界 (4.5m)

枝の構成や樹冠線を考えて不要な副主枝や側枝を分枝部で切除する。

不要枝の整理

定芽の上で切除

外芽は残す

外芽を残し、定芽の真上で切詰める。

側枝の切除位置

安全の確保・樹木の健全育成のため、枯枝、からみ枝、逆枝、建築限界を越境している枝などの支障枝は適切に切除する。
アメリカシロヒトリの食害が多いので、発生期の見回り点検により早期に処置する。

こぶや胴ぶきから出た枝

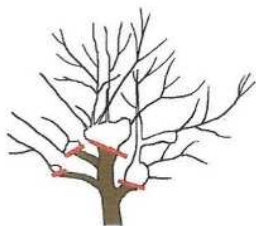
・不定芽の発生防止。
・樹木の健全育成を図るため、カサの形成を促す適切な位置で切除する。

歩道側建築限界 (2.5m)

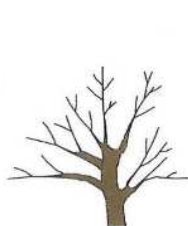


コブの切断面は平滑に仕上げ、防菌及び癒合促進処理を施す。

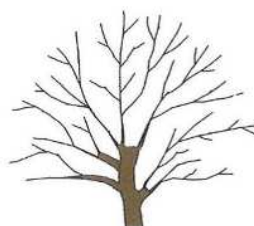
* 頂部の仕立て方



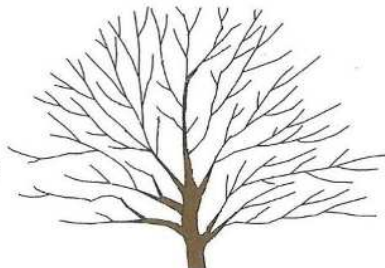
剪定前
(初年度剪定位置)



初年度剪定



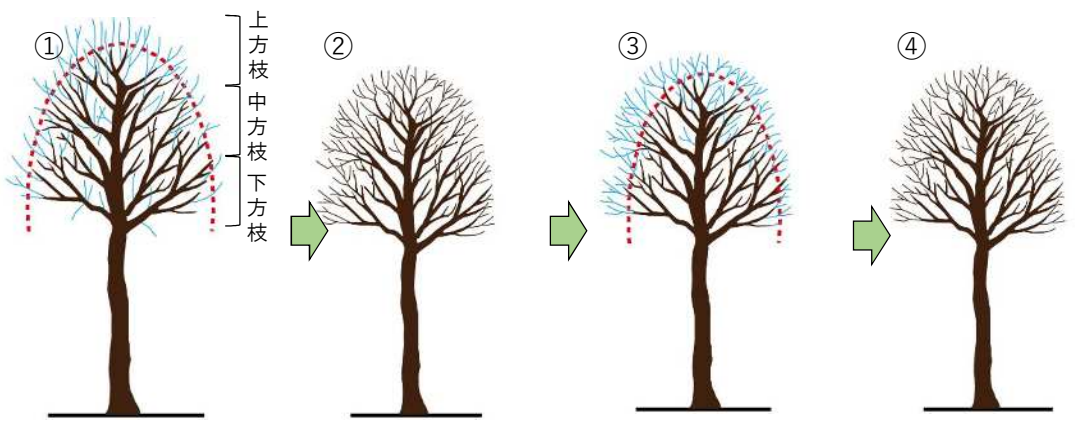
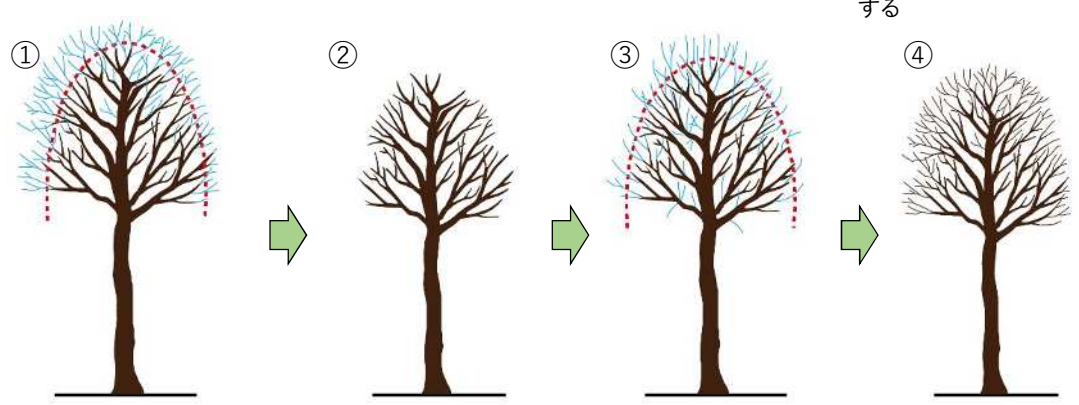
2年目剪定後



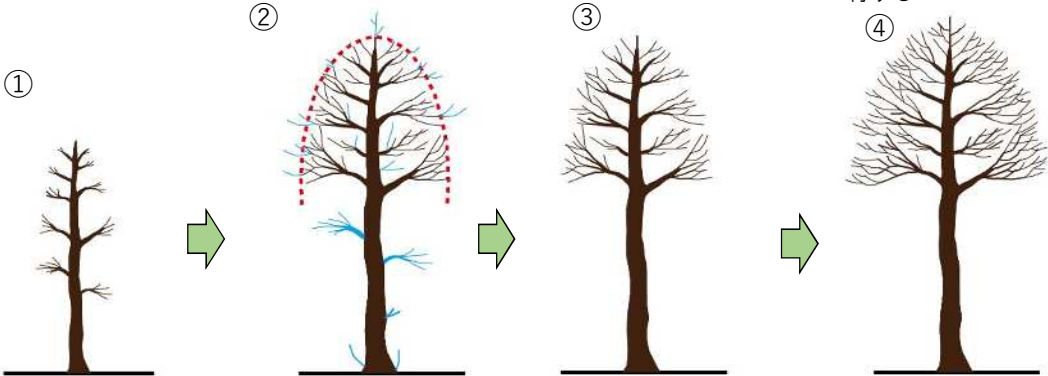
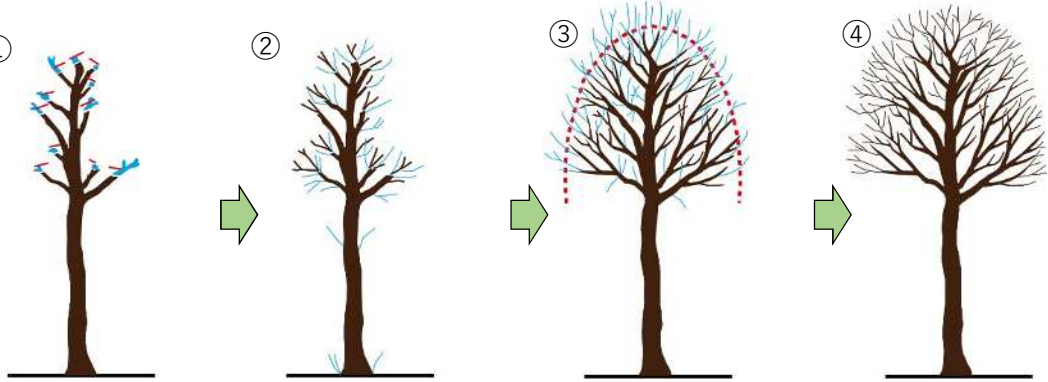
樹冠の仕上がりイメージ

切詰め剪定を繰り返した結果、頂部が「こぶ状」になっている場合、「こぶ」を切除して、頂部をおわんを伏せたような形に柔らかく作り直す。

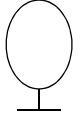
■樹種別剪定標準計画

樹種	トウカエデ
維持タイプ	<p>・萌芽力が強く、枝が対生するので、枝を交互に抜いて枝全体に日照が当たるようにする。</p> <p>・主枝から若枝の更新を繰り返して行くと、主枝の先にコブができるので、コブ手前の若枝を適宜残して切返し剪定を行う。</p> <p>・横枝を生かし立枝を除くようにするが、葉の重さで枝先が下垂すると見苦しいので、適宜切返しで枝先を軽くする。</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな卵円形樹形を作る。 ・頂部優勢を意識して、上方の枝の密度を薄くする。 ・下方枝の切り過ぎに注意して剪定する。 ・枝の伸びしろを考慮して、現状より樹高と枝張をそれぞれ目標樹形よりも小さくなるように剪定する。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・樹形が整えば冬期剪定は1年置き程度でよい。 ・頂部優勢のコントロールと不要枝を除去する剪定を繰り返す。 ・切返し剪定を主体とすれば大きな切り口ができないため、翌年以降も新生枝が著しく発生することは少ない。
縮小タイプ	<p>・対象樹木が目標樹形よりも大きい場合、副主枝の切詰め剪定によって樹形を縮小し、後に萌芽してくる枝を数年かけてコンパクトに整え直していく。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頂部優勢のコントロールを意識し、下方枝の切り過ぎに注意、下方ほど多く枝を残す様に剪定する。 ・残した枝が樹冠線より突出している場合は、側枝を外芽の直上で斜め切りする。 ・やや強い剪定をする場合は、副主枝を切詰め剪定し卵円形に調整する。 ・定芽のない枝はブツ切りにせず切断面を斜め切り、ふところ枝がある場合は、ふところ枝の直上で斜め切りする。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・副主枝を切詰め剪定した枝に複数の新生枝が出ているので、2～3本残して剪定して側枝を育てる。 ・ふところ枝を残して剪定した枝は、新生枝を3～5本残し側枝を育てる。

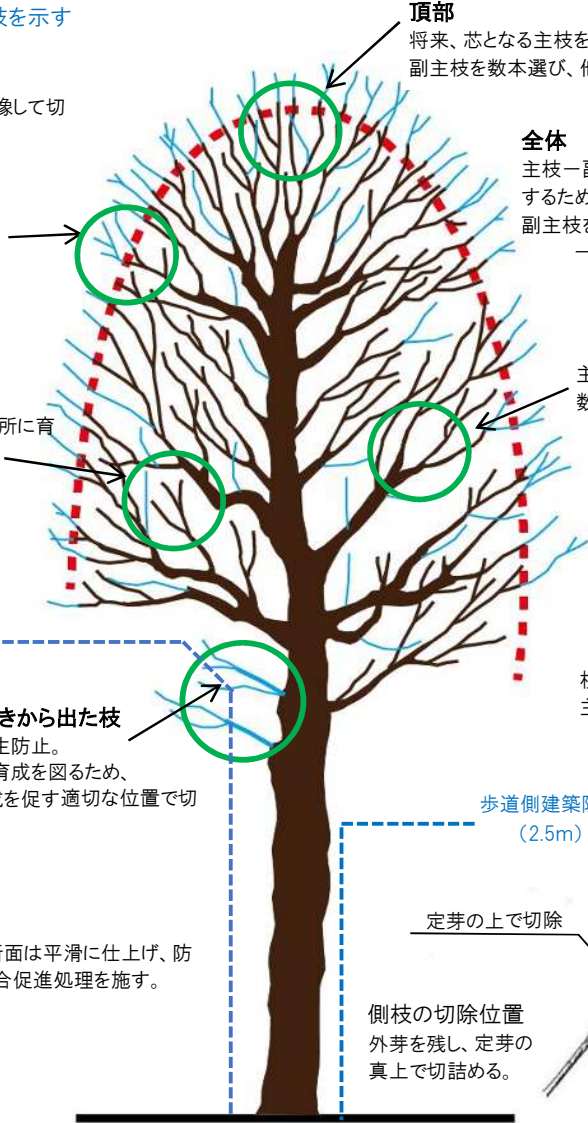
■樹種別剪定標準計画

樹種	トウカエデ
<p>育成拡大タイプ</p>	<p>・樹形全体を大きくすることを目指し、将来の骨格を定め、枝のバランス等を考慮しながら育成する。 ・建築限界内の支障枝や込み入った枝等の除去は枝抜き剪定を基本とし、切詰め剪定は最小限にとどめる。 ・立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめる。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・育成を目的として基本的に枝の縮小は行わず、枝抜きによって不要枝を除去し、枝の密度を調整する（切返し剪定、枝おろし剪定）。 ・自然樹形に相似した樹形(卵円形)に整える。</p> <p>②～③ ・頂部優勢を意識しながら切返し剪定により枝の密度をコントロールする。 ・不要枝を除去する軽微な剪定を基本とし、切り過ぎに注意する。 目標樹形に達するまでは、この剪定を繰り返す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら、維持タイプに移行し、切返し剪定を主体に側枝を整理して柔らかな卵円形樹形をつくる。</p>
<p>【参考】樹形再生タイプ</p>	<p>・幹曲がりや片枝など微小剪定で対応できない樹形の悪い樹木は、主枝や幹の梢部を含めて切詰め剪定を行い、骨格を作り直す。 ・目標樹形を目指した切詰め剪定により枝数の少ない極端な樹形となるため、実施に際しては関係各所との丁寧な調整や説明が必要である。</p> <p>(1～2年後に実施)</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・大枝の剪定は、剪定箇所が裂けないよう二段切りとする。 ・主枝を切詰め剪定し、骨格となる枝の長さを調整する。 ・卵円形となるように、また、下方ほど枝数を多く残すよう留意する。</p> <p>②～③ ・外側に向かって素直に伸びた枝を数本残して、不要枝といわれる立枝やからみ枝などを切除する。 ・切り口から萌芽していない場合は、萌芽している部位まで切戻す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら維持タイプに移行し、不要枝の枝抜きと切返し剪定によって樹形を維持する。</p>

■樹種別剪定標準計画

樹種	ユリノキ		
管理方向性	<ul style="list-style-type: none"> 概ね卵円形の樹形となるよう、枝抜きと切返し剪定により、主枝、副枝、側枝から成るバランスの取れた枝構成を目指す。 夏期剪定は緑陰形成と樹冠線を整えることを目的とし、空が少し透けて見える程度に込み入った枝を透かす。 		
剪定時期	冬期：12月～2月頃	目標樹形：卵円形 枝張り/樹高比：0.6～	 樹形イメージ
目標樹形の設定	<ul style="list-style-type: none"> 目標樹形は「第2章 1. 管理目標樹形の設定」(P.7～)を参考に設定する。 剪定樹形は樹木の伸長量をもとに決定する。 		

* 青色の枝：不要・剪定対象枝を示す



頂部
将来、芯となる主枝を伸ばすため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。

上方枝
形成する樹形の樹冠線を想像して切り過ぎない。

側枝
副主枝から発生した側枝は切詰めて樹冠線を整える。
樹冠幅
樹木の中間枝を基本とする。

ふとこ枝
副主枝として伸ばし、枝が必要な場所に育成する。立枝は切除する。

車道側建築限界 (4.5m)

こぶや胴ぶきから出た枝
不定芽の発生防止。樹木の健全育成を図るため、カサの形成を促す適切な位置で切除する。

歩道側建築限界 (2.5m)

下方枝
少なくなりがちであるため意識的に残すようにする。

全体
主枝—副主枝—側枝のバランスのとれた構成とするため、主枝から伸びた優勢な副主枝を数本選び、他の枝は切除する。
→残した副主枝から発生した側枝を切詰めて樹冠線を整える。

主枝から伸びた副主枝は優勢なものを数本残し、他は切除する。


枝の構成や樹冠線を考えて不要な副主枝や側枝を分枝部で切除する。

不要枝の整理

定芽の上で切除

側枝の切除位置
外芽を残し、定芽の真上で切詰める。

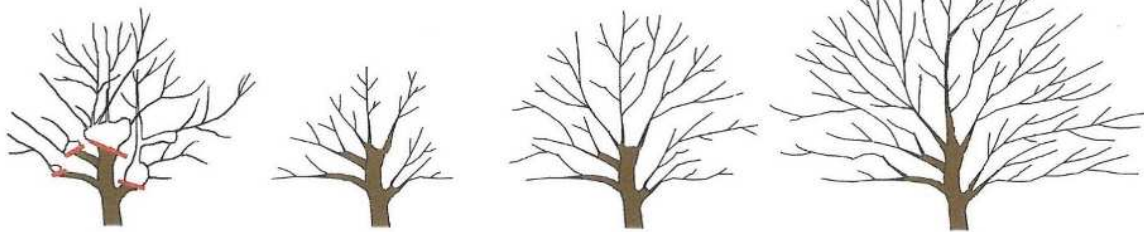
外芽は残す



コブの切断面は平滑に仕上げ、防菌及び癒合促進処理を施す。

安全の確保・樹木の健全育成のため、枯枝、からみ枝、逆枝、建築限界を越境している枝などの支障枝は適切に切除する。

* 頂部の仕立て方



剪定前 (初年度剪定位置)

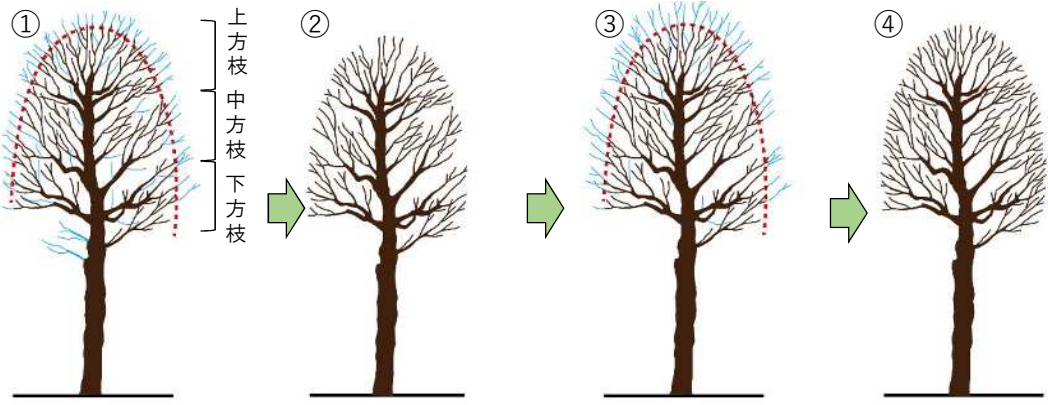
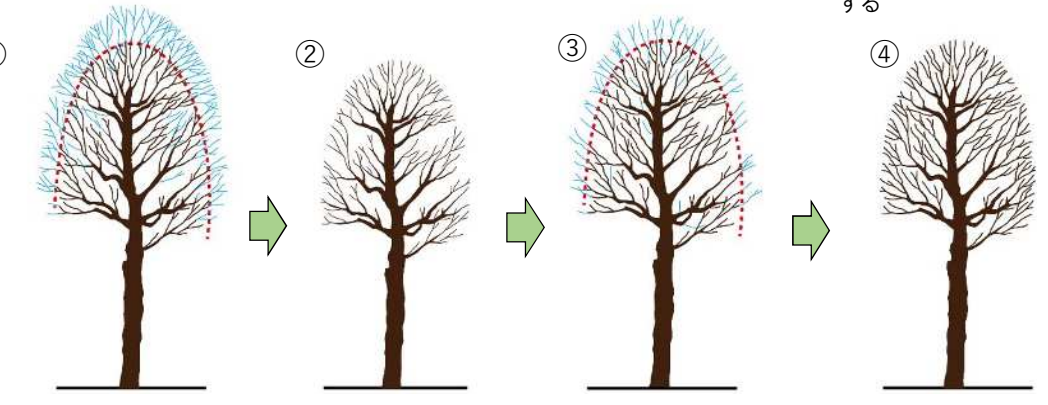
初年度剪定

2年目剪定後

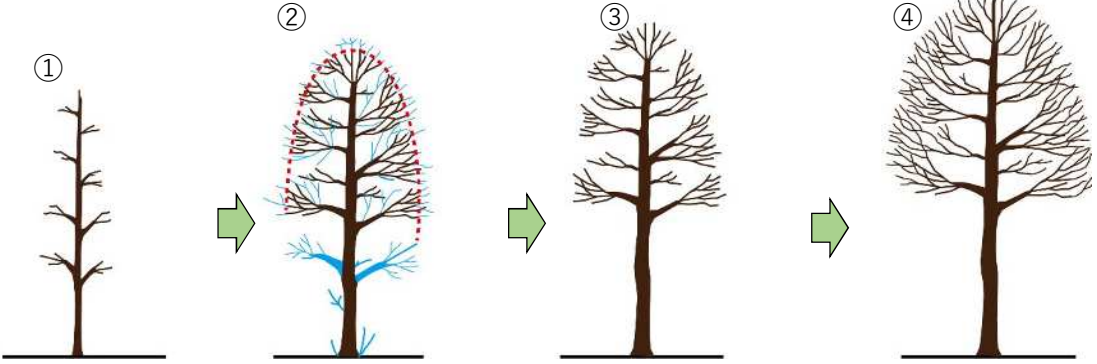
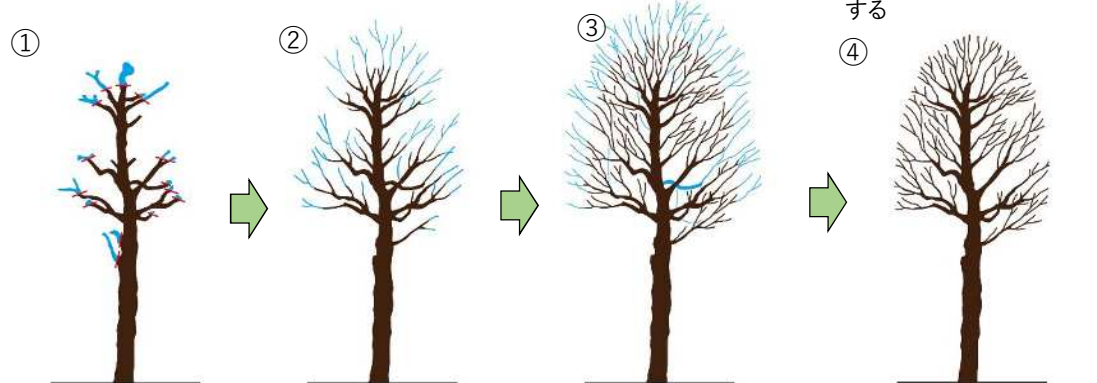
樹冠の仕上がりのイメージ

切詰め剪定を繰り返し行った結果、頂部が「こぶ状」になっている場合、「こぶ」を切除して、頂部をおわんを伏せたような形に柔かく作り直す。

■樹種別剪定標準計画

樹種	ユリノキ
維持タイプ	<p>・生長力、萌芽力ともに強いので樹形を整えやすいが、枝数が多いと内側の枝が日照不足で枯れていくので、枝全体に日照が当たるよう細めの枝を間引き、強い枝を強健に育成する。</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな卵円形樹形を作る。 ・頂部優勢を意識して、上方の枝の密度を薄くする。 ・下方枝の切り過ぎに注意して剪定する。 ・枝の伸びしろを考慮して、現状より樹高と枝張がそれぞれ目標樹形よりも小さくなるように剪定する。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・樹形が整えば冬期剪定は1年置き程度でよい。 ・頂部優勢のコントロールと不要枝を除去する剪定を繰り返す。 ・切返し剪定を主体とすれば大きな切り口ができないため、翌年以降も新生枝が著しく発生することは少ない。
縮小タイプ	<p>・対象樹木が目標樹形よりも大きい場合、副主枝の切詰め剪定によって樹形を縮小し、後に萌芽してくる枝を数年かけてコンパクトに整え直していく。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>①～②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頂部優勢のコントロールを意識し、下方枝の切り過ぎに注意、下方ほど多く枝を残す様に剪定する。 ・残した枝が樹冠線より突出している場合は、側枝を外芽の直上で斜め切りする。 ・やや強い剪定をする場合は、副主枝を切詰め剪定し卵円形に調整する。 ・定芽のない枝はブツ切りにせず切断面を斜め切り、ふところ枝がある場合は、ふところ枝の直上で斜め切りする。 <p>③～④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・副主枝を切詰め剪定した枝に複数の新生枝が出ているので、2～3本残して剪定して側枝を育てる。 ・ふところ枝を残して剪定した枝は、新生枝を3～5本残し側枝を育てる。

■樹種別剪定標準計画

樹種	ユリノキ
<p>育成 拡大 タイプ</p>	<p>・樹形全体を大きくすることを目指し、将来の骨格を定め、枝のバランス等を考慮しながら育成する。 ・建築限界内の支障枝や込み入った枝等の除去は枝抜き剪定を基本とし、切詰め剪定は最小限にとどめる。 ・立枝やからみ枝、過度な徒長枝等の不要枝を除去する程度の剪定にとどめる。</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・育成を目的として基本的に枝の縮小は行わず、枝抜きによって不要枝を除去し、枝の密度を調整する。 (切返し剪定、枝おろし剪定) ・自然樹形に相似した樹形(卵円形)に整える。</p> <p>②～③ ・頂部優勢を意識しながら切返し剪定により枝の密度をコントロールする。 ・不要枝を除去する軽微な剪定を行うことを基本とし、切り過ぎに注意する。 ・目標樹形に達するまでは、この剪定を繰り返す行う。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら、維持タイプに移行して、切返し剪定を主体に側枝を整理し、柔らかな卵円形樹形をつくる。</p>
<p>【参考】 樹形再生 タイプ</p>	<p>・幹曲がりや片枝など微小剪定で対応できない樹形の悪い樹木は、主枝や幹の梢部を含めて切詰め剪定によって骨格を作り直す。 ・目標樹形を目指した切詰め剪定により枝数の少ない極端な樹形となるため、実施に際しては関係各所との丁寧な調整や説明が必要である。</p> <p>(1～2年後に実施)</p> <p>概ね目標樹形に達した段階で維持タイプに移行する</p>  <p>① ・大枝の剪定は、剪定箇所が裂けないよう二段切りとする。 ・主枝を切詰め剪定し、骨格となる枝の長さを調整する。 ・卵円形となるように、また、下方ほど枝数を多く残すことに留意する。</p> <p>②～③ ・外側に向かって素直に伸びた枝を数本残して、不要枝といわれる立枝やからみ枝などを切除する。 ・切り口から萌芽していない場合は、萌芽している部位まで切戻す。</p> <p>③～④ ・目標樹形に達したら維持タイプに移行し、不要枝の枝抜きと切返し剪定によって樹形を維持する。</p>

<参考文献>

- ・『道路緑化技術基準・同解説』平成 28 年 3 月 公益財団法人 日本道路協会
- ・『都市緑化ハンドブック（街路樹編）』平成 20 年 6 月 社団法人^(*) 日本造園建設業協会
- ・『街路樹剪定ハンドブック』平成 23 年 8 月 社団法人^(*) 日本造園建設業協会

(*)現在は一般社団法人